

京都市内遺跡試掘調査概報

平成14年度

2003年3月

京都市文化市民局



写真1 長岡京・獨立柱建物1北側柱列検出状況（西から）



写真2 平安宮大極殿院跡東方・土藏1出土小型軒丸瓦

ご あ い さ つ

京都は、山紫水明の恵まれた自然と、世界に誇る貴重な文化遺産に満ち、更には長い歴史と伝統に培われた文化がまちに息づく文化首都といわれる都市であります。市内の埋蔵文化財包蔵地には、時代ごとに幾層にもわたり積み重ねられた歴史の重みをもつ遺跡が数多く存在しております。

このような埋蔵文化財は、日本の歴史や文化の成り立ちを知ることができる国民共有の貴重な財産であり、将来にわたって我が国の文化発展の基礎をなすものであることが広く認識され、その保存と活用が図られなければなりません。

しかしながら、埋蔵文化財包蔵地内において土木工事等の開発行為が行われる場合などにそのままにしておくこと埋蔵文化財に重大な影響を及ぼします。先人が残した埋蔵文化財を引き継いだ私たちは、その保存と開発との調整を適切に行い、これを後世に伝承していく責務があります。

本市では、こうした考えの下、京都の貴重な埋蔵文化財の保護に努めており、この度、平成14年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査の結果をまとめた概要報告書を作成致しました。調査のうち、試掘調査は京都市埋蔵文化財調査センターが実施し、発掘調査及び立会調査は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所へ委託して実施したものです。

各調査の実施に当たりまして、御理解と御協力を賜りました市民の皆様をはじめ、御指導、御助言を賜りました関係機関の皆様へ深く感謝申し上げますとともに、本報告書が京都の歴史を知るための一助として、お役に立てば幸いに存じます。

平成15年3月

京都市文化市民局長
杉原和彦

例 言

- 1 本書は、京都市が文化庁国庫補助を得て実施した平成14年度の京都市内遺跡試掘調査概要報告書である。平成14年1月から12月まで実施した試掘調査のうち、重要な成果のあったものを対象に概要を報告している。ただし、試掘の結果発掘調査を指導したものについては、発掘調査報告書を待つこととし、一覧表にのみ掲載している。
- 2 試掘調査を実施した総ての地区・所在地・調査日・調査概要については、試掘調査一覧表に掲載（37～40頁）している。なお、各章表題末尾の番号と調査・一覧表の番号並びに図版の番号は対応している。
- 3 本文の執筆分担は、本文の末尾に記している。
- 4 本書に使用した地図は、本市の都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2500）を複製して調整したものを掲載している。なお図版に使用した地図の縮尺は以下のとおりである。
図版1～13 1/8,000 図版14～19 1/10,000
- 5 本書に使用した上塗り色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準上色板」に準じた。
- 6 遺物整理にあたっては、丸山裕見子・上茶谷美保・守山義幸の協力を得た。
- 7 調査及び本書作成は京都市埋蔵文化財調査センターが担当し、次の機関の協力を得た。
京都市文化市民局文化財保護課・（財）京都市埋蔵文化財研究所

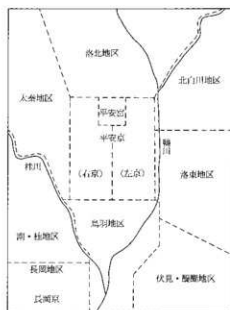


図1 調査地区割図

目 次

	頁
I 試掘調査の概要	1
II 平安宮	3
1 大極殿院跡東方・聚楽遺跡（上京区小山町908-32）	3
2 掃部寮跡（上京区仁和寺街道六軒町西人四番町139-1他）	9
3 中和院跡（上京区千本通下立売上る十四軒町395）	11
III 平安京左京	14
1 北辺三坊五町跡・内膳町遺跡（上京区烏丸通一条下る竜前町590, 407-1）	14
IV 平安京右京	19
1 三条一坊十二町跡・壬生遺跡（中京区西ノ京東月光町9, 9-1）	19
2 四条一坊十二町・十三町跡（中京区壬生森町29-1, 29-2）	22
3 五条四坊十五町跡（右京区西院東貝川町60-1, 61-1）	26
4 八条二坊十六町跡・衣田町遺跡（下京区西七条南衣田町3他）	29
V その他市内遺跡	32
1 長岡京左京五条二坊十六町跡（伏見区羽東師菱川町302-1）	32
2 北野廃寺・北野遺跡（北区北野上白梅町7）	35
VI 試掘調査一覧表	37
報告書抄録	41

図 版 目 次

- 図版1 平安宮
図版2 左京北辺・一・二・三条 一・二坊
図版3 左京北辺・一・二・三条 三・四坊
図版4 左京 四・五・六条 一・二坊
図版5 左京 四・五・六条 三・四坊
図版6 左京 七・八・九条 一・二坊
図版7 左京 七・八・九条 三・四坊
図版8 右京北辺・一・二・三条 三・四坊
図版9 右京北辺 一・二・三条 一・二坊
図版10 右京 四・五・六条 三・四坊
図版11 右京 四・五・六条 一・二坊
図版12 右京 七・八・九条 三・四坊
図版13 右京 七・八・九条 一・二坊
図版14 仁和寺院家跡・音戸山古墳群・一ノ井遺跡・段ノ山古墳・広沢古墳群・
相国寺旧境内
図版15 植物園北遺跡・岩倉忠在地遺跡・北野廃寺・北野遺跡・北白川廃寺
図版16 白河街区跡・六勝寺跡・法興院跡・鳥辺野・山科本願寺南殿跡
図版17 伏見城跡・唐橋遺跡・革嶋館跡・中久世遺跡・史跡名勝嵐山・長岡京跡
図版18 鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡
図版19 長岡京跡

挿 図 目 次

	頁		頁
図1 調査地区割図	例言	図24 調査位置図	22
図2 調査位置図	3	図25 遺構平面図・断面A	23
図3 トレンチ位置図	3	図26 上層比較図	24
図4 各トレンチ土層図	4	図27 出土遺物実測図	25
図5 上層1 出土遺物拓本・実測図	5	図28 調査位置図	26
図6 土層2 出土遺物拓本・実測図	6	図29 トレンチ位置図・遺構平面図	27
図7 土層4 出土遺物実測図	7	図30 調査区土層断面図	27
図8 調査位置図	9	図31 出土遺物実測図	28
図9 トレンチ位置図	9	図32 周辺の調査状況	28
図10 3 トレンチ南端部西壁土層図	10	図33 調査位置図	29
図11 調査位置図	11	図34 トレンチ位置図	30
図12 トレンチ位置図	11	図35 上層断面図	30
図13 1 トレンチ西壁土層断面図	12	図36 出土遺物実測図	31
図14 出土遺物拓本・実測図	13	図37 調査位置図	32
図15 調査位置図	14	図38 土層断面図	33
図16 トレンチ位置図・遺構平面図	15	図39 トレンチ位置図	33
図17 調査区土層断面図	15	図40 遺構平面図	34
図18 出土土器実測図	16	図41 出土遺物拓本・実測図	34
図19 出土金箔瓦実測図	17	図42 調査位置図	35
図20 調査位置図	19	図43 土層断面図	35
図21 トレンチ位置図	20	図44 トレンチ位置図	36
図22 土層断面図	20	図45 出土軒平瓦	36
図23 出土遺物拓本・実測図	21		

表 目 次

	頁
表1 年次別試掘調査実施件数表	1
表2 試掘調査一覧表	37~40

写 真 目 次

	頁
写真1 長岡京・掘立柱建物1北側柱列検出状況（西から）	巻頭図版
写真2 平安宮大極殿院跡東方・土塋1出土小型軒丸瓦	巻頭図版
写真3 上曠1遺物検出状況（南西から）	4
写真4 2トレンチ全景（南から）	4
写真5 東西溝状遺構（北東から）	10
写真6 1トレンチ全景（南東から）	12
写真7 1トレンチ遺構検出状況（東から）	14
写真8 1トレンチ溝1検出状況（北から）	26
写真9 掘立柱建物1西側柱列検出状況（南から）	32

I 試掘調査の概要

1 試掘調査の目的と意味

京都市内には約570箇所の周知の埋蔵文化財包蔵地（以下、遺跡という）が所在している。なかでも平安京跡、長岡京跡、伏見城跡といった広大な都市遺跡が人口の集中する市街地と重複しており、各種土木工事等による遺跡への影響が日常的に発生している。京都市では、これらの遺跡内で実施される各種土木工事等について適切で円滑な保護を実施するために、文化財保護法第57条の2及び57条の3に基づく届出・通知（以下、届出・通知という）の内容と遺跡の重要度に応じた、発掘調査・試掘調査・立会調査・慎重工事の4種の指導を行っている。また、開発工事が実施されない場合でも、遺跡の内容や範囲を正確に把握し、的確な保護や周知が行えるように確認調査を実施することがある。

市内の遺跡について提出された届出・通知件数は、平成14年に888件あり、平成13年の946件よりも減少している。これらの届出・通知に対し、京都市埋蔵文化財調査センター（以下、センターという）は発掘調査17件、試掘調査73件、立会調査475件、慎重工事323件の指導を行った。

平成14年は、前年度1～3月期届出・通知及び史跡等の分も含め計76件の試掘調査を実施した。その結果、先の指導に加え、発掘調査5件、試掘調査の延長3件、設計変更による遺跡保存5件、追加的な立会調査4件の指導を行った。

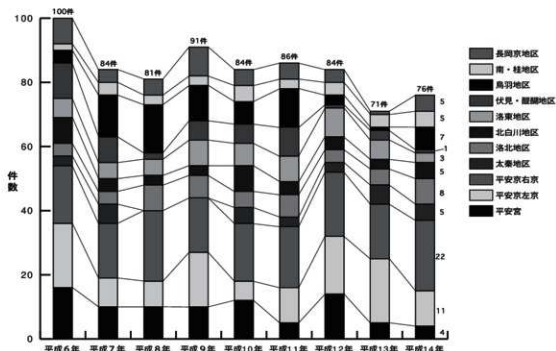


表1 年次別試掘調査実施件数

2 試掘調査の概要

センターは、事業主の協力を得て平成3年より直管で試掘調査を実施しており、史跡・名勝指定地内で実施される現状変更に伴う試掘調査についても、本市文化財保護課と共同で実施している。

試掘調査の件数は、平成6年の100件をピークに平成12年までは81件から91件の間で推移していたが、平成13年、14年と減少幅が大きい。これは、バブル崩壊後の不況が一段と厳しさを増す中で、試掘対象となる大規模な土木工事をする余力が失われつつあることを示している。

センターでは京都市内を遺跡の性格と地域性をもとに11の地区に分類しており、平成14年における各地区の試掘件数は、平安宮4件、平安京左京11件、平安京右京22件、太秦地区5件、洛北地区8件、北白川地区5件、洛東地区3件、伏見・醍醐地区1件、鳥羽地区7件、南・桂地区5件、長岡京地区5件であった。試掘総件数は漸減傾向が明瞭に認められるが、地区ごとにその傾向は大きく異なる。平安宮は平成13年以来減少著しく、平成6年の16件から4件まで減少した。同様の傾向は、平安京左京、洛東地区、伏見・醍醐地区でも認められる。これらの地域は旧来からの商業・住宅地域であり、集合住宅の建設が減少に転じたことが原因と考えられる。

一方、平安京右京地区は景気の動向に左右されず、常に20件前後の試掘調査件数がある。今年も22件の試掘調査を実施したが、多くは大型店舗や量販店などである。この地域は旧市街地に近く、交通至便であり、比較利用可能な土地が大きいことが考えられる。

史跡・名勝は、涉成園1件、嵐山2件で実施した。涉成園については、庭園工事を利用して豊臣秀吉の築いた御土居の範囲確認を目的に試掘調査を実施した。

発掘調査は平安宮1件（No.24）、平安京左京2件（No.27、No.33）、北白川地区1件（No.60）、鳥羽地区1件（No.67）の計5件を指導した。No.24では東方官衙群に位置する西院の西側築地の痕跡及び東西向領溝を、No.27では中世以前の遺構群を、No.33では堀小路北側溝及び節筒小路東側溝をそれぞれ検出した。また、No.60（白河街区跡）では南北方向の巨大な堀状遺構を、No.67（鳥羽離宮跡）では金剛心院の北限溝を検出している。

重要遺構を精査するために試掘調査を延長したものは、平安宮1件（No.1）、平安京右京1件（No.7）、長岡京地区1件（No.76）の計3件である。No.1では平安前期の遺物群を、No.7では西節筒小路の東西両側溝を、No.76（長岡京跡）では長岡京期の掘立柱建物跡をそれぞれ検出した。

設計変更による遺構の保存は、平安京左京1件（No.30）、平安京右京2件（No.6、No.70）、洛北地区1件（No.54）、長岡京地区1件（No.75）の計5件ある。No.30では中世末の遺構を、No.6では掘立柱建物跡1棟を、No.70では平安時代以前の遺構群を、No.54（北野庵寺）では推定講堂跡の北東隣接地で土塚や柱穴を、No.75（長岡京跡）でも柱穴や溝等を検出している。

追加的な立会調査は、平安京左京1件（No.25）、平安京右京1件（No.35）、太秦地区1件（No.12）、洛東地区1件（No.62）の計4件ある。No.25並びにNo.12（菅戸山古墳群）では試掘可能範囲が限定的であったため、No.35は西節筒小路西側溝が検出されたため、No.62（山科本願寺南殿跡）は外堀等が発見される可能性があったため、立会調査を指導している。（馬瀬智光）

II-1 平安宮大極殿院跡東方・聚楽遺跡 No.1

1 調査経過

調査地は、千本丸太町交差点から東へ一筋目の十屋町通を北に上った、上京区小山洞908-32である。平安宮の推定復元によれば、当該地は大極殿院の東方で中務省との間の空地に位置している。平成3年度にはこの場所から南に20～30m離れた所で土屋町通を挟んで2箇所、国庫補助による発掘調査を実施し¹⁾、中務省の北西隅部の築地痕跡や割溝、また大極殿院と中務省の間の整地層などを発見している。試掘調査は、鉄骨2階建て個人住宅建設に先立って平成14年1月28日に実施した。南北方向のトレンチを2箇所調査した結果、地表下0.5mで平安時代前期の土器や焼土・炭を多く含む整地層と同時期の土壌を検出し、遺構・遺物が良好に残存していることを確認した。

この調査所見から、施主に対して国庫補助による発掘調査の実施協力を求めたのであるが、補助執行が次年度になるため、工事着工が半年ほど遅れることを理由に同意を得ることが出来なかった。このため、工事で地中梁が通る部分を対象とした最小限の調査を2月12～14日の3日間にわたって実施した。この調査では、前回に調査した2箇所の南北トレンチを幅2mに拡張する形で調査を行った。調査の結果、両トレンチから土壌を検出し、また、土師器を中心とする多量の土器類と瓦を採取した。

2 遺構

各トレンチの層序は、基本的には同じで表



図2 調査位置図(1:500)

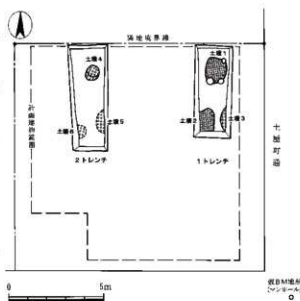


図3 トレンチ位置図(1:200)

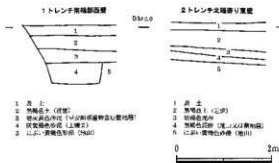


図4 各トレンチ土層図 (180)



写真3 土坑1遺物検出状況 (南西から)



写真4 2トレンチ全景 (南から)

ある。掘方は、ほぼ垂直でその深さは約40cm、埋土は灰黄褐色砂泥、平安前期の土器類が少量出土した。

土坑3 1トレンチの南東隅で検出した推定直径1.5mの円形土坑である。埋土は黄褐色泥砂で近世の陶磁器類が出土した。調査範囲が僅かなため全容は不明であるが、井戸の掘方の可能性もある。

土坑4 2トレンチの北寄りの整地層上面で検出した長軸0.9m・短軸0.7mほどの楕円土坑で

土下に近世の黒褐色土が認められ、その下に平安時代前期の遺物や炭・焼土を含む厚さ15～30cmの整地層が存在する。この整地層の下層は地山の黄褐色砂泥もしくは砂礫層である。1トレンチの北端寄りでは、地山層が比較的高いレベルにあるため整地層は認められず、近世の黒褐色土の直下が地山面になる。敷地の東寄りを調査した1トレンチでは、この地山面で平安時代前期の上層を2基(土

坑1・2) 検出した。

また、敷地の西寄りを調査した2トレンチでは、整地層の上面で土坑(土坑4)を認め、さらに土坑状遺構2基(土坑5・6)を認めた。整地層の下層である地山のふい黄褐色砂礫層では一辺が40cmほどで深さが20cmほどの小規模な土坑または柱穴を2基認めた。

土坑1 1トレンチの北寄りで検出した南北1.3m、東西1.1mの隅丸方形の土坑である。ほとんど垂直に掘られた土坑の深さは35cmほどある。土坑の埋土は炭や焼土を含む黒褐色砂泥で平安時代前期の土器類と瓦類がまとまって出土した。

土坑2 1トレンチの南西部で検出した土坑である。南北1.5m以上、東西0.8m以上あり、その平面形は土坑1と同様に隅丸方形を呈しそうで

ある。深さは20cmほどで埋土は整地層とよく似た黒褐色砂泥、平安時代前期の土器を一括廃棄した土壌である。

土壌5・6 2トレンチの南寄りの整地層上面で検出した土器集中出土地点である。ともに明確な掘方が認められず、整地作業の過程で土器を一括廃棄した場所と考えているが、便宜上土壌状遺構として取り扱った。土器の一括廃棄という意味では土壌4も同時期・同性格の遺構である。土壌5はトレンチの東縁で検出し、南北1.1m、東西0.5m以上の範囲（おそらく円形に）に土器が集中する。土壌6はトレンチの西縁で検出したが、おそらく直径が0.7mの円形状に土器が集中していると考えられる。（長谷川行孝）

3 遺物

今回の調査は極めて限られた面積とならざるを得なかったが、それに比して出土遺物の量は多い。遺物コンテナにしておよそ6箱分、その大部分は土器であり、さらにそのほとんどが土師器である。平成3年度の調査成果から、むしろ大量の瓦の出土を予想していたのであるが、それはまったく覆される結果となった。これらは、上述したように、明確な掘方を持った土壌1・2・4と、整地上中の土器集中地点ともいべき土壌状遺構5・6から、投棄された状況で出土したものである。以下、主要な3遺構の出土遺物について報告する。

土壌1出土遺物（図5） 土師器類が人部分であるが、一定量の軒瓦が混在するのはこの土壌1だけである。1～4は土師器杯A。いずれも体部外面はユビオサエに粗いナデを加え、口縁をヨコナデする。口縁部は外反気味に開き、端部を軽く内側へ折り曲げる。5は土師器杯B。外部調整はユビオサエで、内面には整形時のハケメが明瞭に残る。高台は断面三角形のものを貼り付

ける。6・7は土師器皿A。器高の低い6は外面にナデとユビオサエを施し、立ち上がりは底部に対して明瞭な角度をもつ。7は外面下半をヘラケズリするが、口縁のヨコナデによって生じた凹部には及んでいない。8

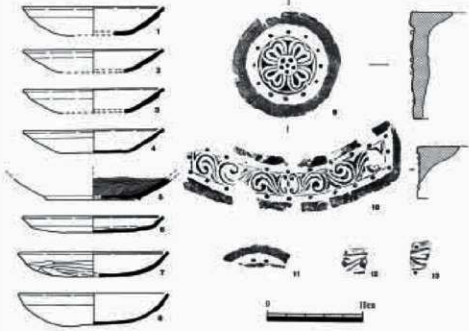


図5 土壌1出土遺物拓本・実測図（1：4）

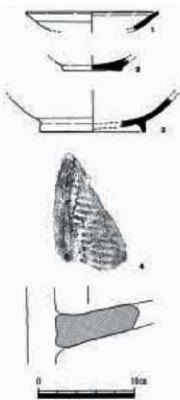


図6 土壌2出土遺物拓本・実測図
(1:4)

小さい破片であり、図示した拓本はそれらを机上で合成したものである。また参考として、比較的残りの良い破片の断面図を掲げた。対向C字に紡錘形を組み合わせた中心飾から、左右に3回反転する唐草が派生する。上庄田瓦窯出土瓦とほぼ同文であるが、これも今のところ同范例がない。9の軒丸瓦と胎土・焼成・サイズが共通し、後述する11~13の小片3片を除いて、土壌内の出土軒瓦がこの両者に限られることから、セットとして使われていた軒丸・軒平瓦が一括投棄されたものであることは疑いない。なお、これらに組み合わせる丸・平瓦は出土していない。

11は小型軒丸瓦、12・13は長岡宮式と思われる文線を持つ、小型軒平瓦である。いずれも細片。これらの他、土壌1からは緑釉丸瓦が少量出土した。

土壌2出土遺物 (図6) 1は土師器杯Aで、外面にはユビオサエを残す。2は緑釉陶器碗。円盤状高台を持ち、底面以外に淡緑色の釉を施す。3は灰釉陶器碗で、端部を四角く取めた高台を持つ。残存する範囲には明確な施釉は及んでいない。9世紀中葉。4は緑釉の鴟尾片で、鱗に取り付け回りの頂部の破片と思われる。外面には平行タキが残る。なお、土壌1で出土した複弁四葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦は、土壌2でも各1片ずつ出土した。

土壌4出土遺物 (図7) 今回最も多量の遺物が出土した遺構で、境内のほとんどが折り重なった遺物で占められていた。出土遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器などがある。

1~11は土師器杯Aである。口径16cm以下のものが多く、特に16cm台前後が多い。3・4・8・9は外面ヘラケズリだが、口縁が外反するため、ヨコナデによる凹部にはケズリが及んでいない。これ以外は外面ユビオサエで、1・2の口縁には煤が付着する。

は土師器碗A。外面ユビオサエで、口縁端部は丸く収める。いずれも平安京編年のⅡ期古設階に相当する¹⁾。

9は複弁四葉蓮華文軒丸瓦(巻頭・写真2)。直径11.3cmと、明らかに小型の軒丸瓦である。石清水八幡宮採集品²⁾と似るが、珠文配置や圏線の形状が異なり、管見の及ぶ限り同范例は認められない。焼成は良好で、暗灰色を呈する。破片数にして11片が出土し、その中で最も瓦当面の残りが良いものを図示した。裏面まで残る破片が1つもないため、瓦当厚や裏面調整等は不明だが、前者については、裏面を欠損してなお瓦当面から5cmの厚さをもつものがある。丸瓦接合の痕跡が見出せないことや、剥離の状況から一本造りによるものと思われる。しかし、一般に復原されている一本造りの工程とはやや異なり、剥離面に多数観察される粘土の継ぎ目の様子から、瓦当付近に関する限り、ピンポン球より少し小さいくらいの粘土塊を、瓦当範の上に積み上げて作っていると推定される。凸面はタテヘラケズリで平滑に仕上げる。

10は均整唐草文軒平瓦。10片の破片が出土した。どれも薄く

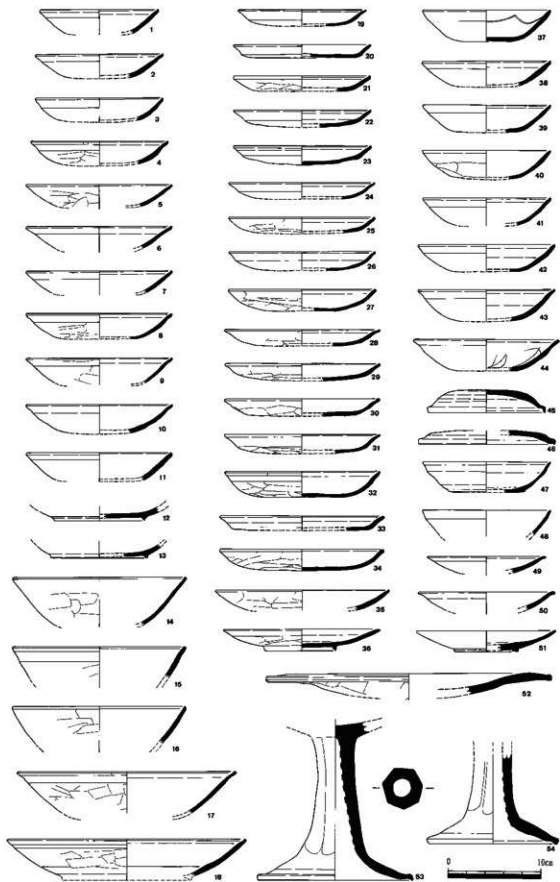


图7 上墩4 出土遗物实测图 (1:4)

12～18は土師器杯B。外面のほぼ全面をヘラケズリする14・16から、端部のヨコナデをケズリ残す15・18、端部の外反が顕著な17といったバリエーションが見られる。

19～35は土師器皿A。口径16～17cmで器高2cm前後のものが多く、口径15cm以下のものも一定量見られる。外面調整はヘラケズリのがユビオサエのものを若干凌駕する傾向にあるが、口径端部まで完全にケズるものは少ない。29と34の内面底部には壁面立ち上がりの回転ナデに先行するハケメ痕跡が認められる。

36は土師器皿Bで、内面回転ナデ、外面ヘラケズリで仕上げている。他のほとんど全ての土師器が黄褐色系の色調を呈するのに対し、赤褐色の色調で胎土も相違しており、産地が異なるものと思われる。

37～44は土師器椀Aである。口径14cm前後・器高3cm前後のものが多い。37は弧状暗文と螺旋暗文で加飾しており、河内産と推定される。また、44は内面にヘラによる沈線と弧線を組み合わせた文様を表している。52～54の土師器高杯は、杯部外面にヘラケズリを施すが、脚部はナデ調整で仕上げられる。

45・46は須恵器杯蓋、47・48は同じく杯であるが、蓋が堅緻に焼成されているのに対し、杯は軟質で土師質に近い。49～51は緑釉陶器皿で、釉調は淡緑色。51には三又トチンの痕跡が残る。

以上、土壌1・2・4の出土遺物は、平安京編年のⅡ期古段階にはほぼ全てが包摂されており、良好な一括資料と言える。またこれを廃棄年代とする小型軒瓦のセットも、文様の・技法的に重要な資料と位置づけうるだろう。（編 大輔）

4 まとめ

今回発見した土壌や整地層には、大規模な火災を物語る炭や焼土が多く含まれていた。また、これらの遺構から出土した土器類が平安時代の前期末～中期初頭頃（9世紀第3四半期前後）に集中していることから、土壌や整地層は貞観18年（876）4月10日に大極殿以下小安殿、蒼竜・白虎兩橋、北門及び北東西の三面廊がごとごとく焼失した火災後の復旧工事に伴う遺構と考えられる。今回の調査は、本来可能であれば国庫補助による発掘調査がベストであったが、年度の間でもあり緊急な調査対応が出来ず残念であった。（長谷川行孝）

註

- 1) 鈴木久男・雨 孝雄「平安宮大極殿東」（京都市文化観光局「平安京跡発掘調査概報平成3年度」）、1992年
鈴木久男・雨 孝雄「平安宮中務省（3）」（同上）、1992年
- 2) 小森俊敏・上村憲幸「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」（財）京都市埋蔵文化財研究所「研究紀要」第3号）、1996年
- 3) 星野敏二編「難波宮瓦葺瓦葺跡」、伏見城跡研究会、2000年、No.289

なお、今回の報告に当たって、以下の方々から多くの御教示・御協力を得た。末尾ながら記して謝意を表します。

網 伊也・岩戸品子・上原真人・植山 茂・鈴木忍司・平尾政幸・雨 孝雄・吉村正親（五十貫瀬ノ歌松崎）

II-2 平安宮掃部寮跡 No.22

1 調査経過

調査地は、仁和寺街道六軒町通の交差点を南に下った上京区仁和寺街道六軒町西入四番町139-1他である。ここに1階建築面積が約180㎡の9階建て賃貸マンションが計画されたため、平成14年10月23日に試掘調査を実施した。

平安宮の推定復元によると当地は、宮内省の被管で宮廷内の行事の設営や清掃をつかさどった掃部寮の北端に位置し、北面築地や側溝などの発見が予想された。

調査は、初めに敷地の奥（東端）で築地や側溝の検出を目的として南北トレンチ（1トレンチ）を設けて機械掘削を行ったが、トレンチ内全城が深さ2m以上まで掘り返された近世の大土壌であったため何も見つからなかった。

次に敷地の北端を東西に調査（2トレンチ）

したところ、表土直下のGL-0.4mで黒ボク系（黒褐色泥土）の安定した地山層が認められた。表土自体も赤黒い泥上層であることからこの土も本来は地山であった可能性が高い。

1トレンチで検出した近世の大土壌の続きは、このトレンチまで及んでいなかったが、顕著な遺構も全く認められなかった。このため敷地の中央に南北トレンチ（3トレンチ）

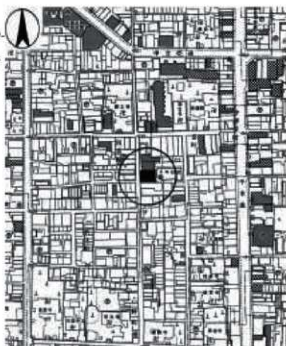


図8 調査位置図 (1:5000)

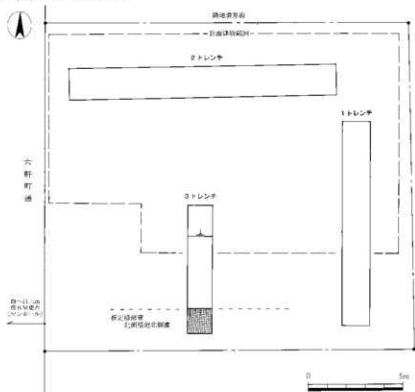


図9 トレンチ位置図 (1:200)

を設けて、再度掃部寮の北面築地や側溝の検出を試みた結果、トレンチの南端部において南に落ち込む溝状の遺構を確認した。この溝状遺構より北側では、特に顕著な遺構も見あたらないことから、溝状遺構を北面築地の北側（外側）の側溝と推定した。

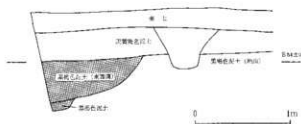


図10 3トレンチ南端部西壁上層図 (1:80)

2 遺構

顕著な遺構は、3トレンチで検出した東西方向の溝状遺構のみである。溝は現地表面から50cmほど下にある黒ボク系の黒褐色泥土をベースとして掘られていた。検出した範囲はトレンチの南端から北に1mまでの間で、ちょうど溝の北肩部から底部にかけての部分である。深さは50cm、幅は2mほどに推定でき、その断面形は緩やかなU字形を呈し底部は一段落ち込むような形状である。埋土の黒褐色泥土からは、緑釉陶器の碗底部や土師器皿の細片が数片出土しただけであった。



写真5 東西溝状遺構（北東から）

3 まとめ

今回の調査では、掃部寮の北面築地の北側溝と推定される東西方向の溝状遺構を敷地の南端部で検出した。掃部寮の区画に関する遺構の検出例は他になく、平安宮復元の一資料を得られたことは、大きな成果であった。なお、検出した東西溝状遺構は敷地の南端に沿って東西に続いていると推定できるが、その区域は今回の施工範囲からは、離れているため地下に温存されることになる。

(長谷川行孝)

II-3 平安宮中和院跡 No.23

1 調査経過

調査地は上京区千本通下立売上る十四軒町395番地の、千本通の東側に面した東西に細長い敷地である。ここに、9階建てのマンションが計画されたため、平成14年10月30日に試掘調査を実施した。

調査場所は、平安宮の推定復元によれば、中和院（南北56丈、東西50丈）の北面築地の外側（北側）側溝の推定ライン上に位置している。このため調査は、中和院の築地や東西方向の側溝を検出することを目的として、計画建物範囲内に東西に2箇所調査区（西側を1トレンチ、東側を2トレンチ）を設けて行った。調査の結果、千本通に近い1トレンチ内で平安時代の土壌と推定東西溝を発見した。

2 遺構

敷地の西寄りを調査した1トレンチでは、地表下0.4mで平安時代前期の遺物を含む厚さ20～40cmの整地層（灰黄褐色泥砂）が認められ、その下層が地山の明黄褐色微砂となる。この地山面で土壌及び東西溝状遺構を検出した。

しかし、1トレンチから5mほど東に離れた所を調査した2トレンチでは、地表下0.7m以下が灰色の砂礫ベースであり、その直上までが近代の整地層のみで、遺構も近代の井戸だけで、1トレンチとは層序が異なるとともに東



図11 調査位置図 (1:5000)

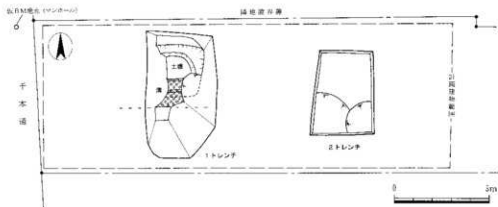


図12 トレンチ位置図 (1:200)

西溝状遺構が続かないことを確認した。

土 壤 西辺部は調査していないが一边が約3m、深さが約1.1mの土塼と考えられる。この土塼の平面形は、上面では方形であるが、底部では直径が1.2mほどの円形状に掘られていたようである。埋土は細かく分層できるが、大半は黒褐色系の泥砂が主体である。土塼が埋まってゆく最終段階での埋土（図13 上層断面図中の3の褐灰色泥砂）からは、土師器を中心とした土器類が出土したが、それ以外の埋土内からの出土品は皆無であった。

溝 上記の土塼によって北肩部分が消滅し、別の近代の上塼によっても削平されている東西方向の溝状遺構である。トレンチ内で東西約1.1mにわたって検出した。溝の深さは最大で1.3mを測り、幅は推定で2.9m、底部での幅は推定1.2mあり、その形状は逆台形と推測される。底部の中央はさらに一段窪み（幅60cm・深さ10cm）小石が集中し、最底部は黄褐色の粘質土を貼り付けているようであった。溝の埋土は土塼と同様に黒褐色系の泥砂が大半を占め、埋土中からの出土品は無かった。

3 遺 物

図示した出土品は、1トレンチの整地層（図14-2・4）及びその下層で検出した土塼の最上層埋土（図14-1・3・5・6）から出土した平安時代前期の土器類と瓦である。

土師器の碗類（2・3・4）は、いずれも直線的に外側に開く体部を持ち、その外面はヘラ削りで仕上げる。高杯（1）はその杯部が低平な作りで口径23.6cmに対して深さが1.1cmである。外面はヘラ磨きで仕上げる。5は灰釉陶器の風字碗の小片である。6は丸当面がかなり摩耗した卑弁蓮華文軒丸瓦で、長岡京からの搬入瓦と推測される。

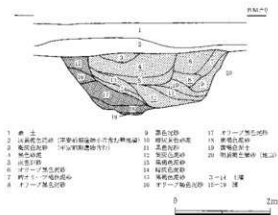


図13 1トレンチ西壁土塼断面図（1：80）



写真6 1トレンチ全景（南東から）

4 まとめ

1トレンチの調査では東西方向の溝状遺構を検出し、その続きと方向を確認するために2トレンチの調査を行ったが、東側には続かないことを確認した。平成6年度に千本通の東側で歩道整備に伴って(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した試掘調査では、当該地のすぐ前の車道で平安時代中期の溝状遺構を検

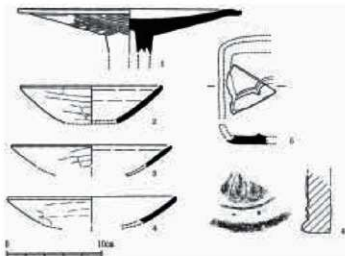


図14 出土遺物拓本・実測図(1:4)

出し、さらにその南7mの地点でも同様の溝状遺構を検出している¹⁾。現在、この2箇所で検出された溝状遺構を中和院北面築地の外溝及び内溝とする平安宮復元モデルが提示されている。今回1トレンチで検出した東西溝状遺構は、時代観に若干違いがあるものの千本通の車道で検出した溝状遺構の続きと思われる。ところがこの溝がまっすぐ東へ続かないことが2トレンチで判明した。

平安宮の平面図を模写したとされる陽明文庫本「宮城図」に描かれている中和院を見ると、南面・東面・北面に出入り口が描かれている。この内、南門と東門はそれぞれ南北・東西の中軸線上に位置しているのに対し、北面の出入り口は明らかに南北中軸線から東にずれた院の北東隅に近い所に描かれている。中和院の復元案が正しく、かつ「宮城図」が正確な模写であれば、今回の調査地はまさに北門付近に該当する。東西溝状遺構がまっすぐ東西に続かない理由として、仮に北面築地に設けられた門が、築地ラインから内側(南側)に少し入った所に造られていたなら、築地側溝も門の位置に沿って南に折れ曲がることも考えられ、あるいは、出入り口の所だけ溝が掘られなかったことも考えられる。

しかし、調査当日、1トレンチと2トレンチの間には、コンクリートで周囲を固めた現代の井戸が残っていて掘削出来ない状況にあり、このため肝心の所が判らないまま調査を終えてしまった。なお、試掘後のマンション建築工事に際して、立会調査を実施したが、溝が南に折れ曲がる確証は得られなかった。

(長谷川行孝)

註

1) 『平安宮』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年

Ⅲ-1 平安京左京北辺三坊五町跡・内膳町遺跡

1 調査経過

調査地は上京区烏丸通一条下る竜前町590, 407-1で一条通烏丸の交差点から南約30mに所在する。平安時代の占有状況は判然としませんが、鎌倉時代初期には皇太后藤原忻子の御所があった。また、当該地を含む五町跡では試掘調査を1回、発掘調査を4回実施しており¹⁾、中世以後遺構密度が急激に増加すること、織豊期には聚楽第と同時期の武家屋敷が存在していたことが明らかにされつつある。

今回、このような場所で能楽堂建設が計画されたため、藤原忻子の御所跡並びに聚楽第武家屋敷跡の残存状況を確認する目的で試掘調査を実施した。能楽堂の計画建築面積は1,376㎡、試掘調査日は平成13年12月3日、調査面積は43㎡であった。

なお、調査は平成13年度に実施し、中世の遺構群及び金箔瓦を含む濠状遺構を検出したことから発掘調査を指導している。しかし、平成14年に入り基礎形状の設計変更が行われ遺構の現状保存が可能になったことから、指導内容の変更と調査状況を正確に記録するため、今回改めて報告を行うこととする。

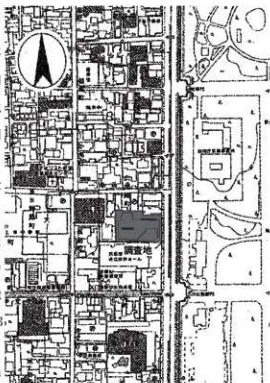


図15 調査位置図 (1:5,000)

2 遺構

試掘調査は、計画建物範囲が広大なため、トレンチを敷地西半に1箇所(1T)、東半に1箇所(2T)設定して実施した。

1T 層序は、現代盛土、焼土、黒褐色泥砂、黒褐色泥砂(整地層2)、褐灰色泥砂(にぶい黄橙色泥砂を含む)、灰黄褐色泥砂(整地層1)と続き、設計GL-1.0mで地山のにぶい黄橙色砂泥となる。この調査区の面積は21㎡しかないが、検出遺構数は柱穴2、土壇12、溝1条に上り、遺構密度は極めて高い。



写真7 1T遺構検出状況(東から)

2 T 基本層序は、現代盛土、黒褐色泥砂、褐灰色泥砂と続き、GL-1.4mで地山の灰黄褐色砂礫層に至る。ただし、西半では同一レベルで炭の混じった整地層に変化しており、地山レベルは一定していない。土壌ないし柱穴状の遺構が7基、濠状遺構1条を検出しており、こちらも遺構密度がかなり高い。ここでは特に濠状遺構について取り上げたい。

濠状遺構は、トレンチ東端から西約4.2mのところを西肩をもち、GL-0.8mの黒褐色泥砂層から切り込んでいる。埋土は黒褐色の色調を呈する泥砂で、中から金箔瓦が出土した。東肩及び深さに関しては試掘調査で確認することはできなかった。

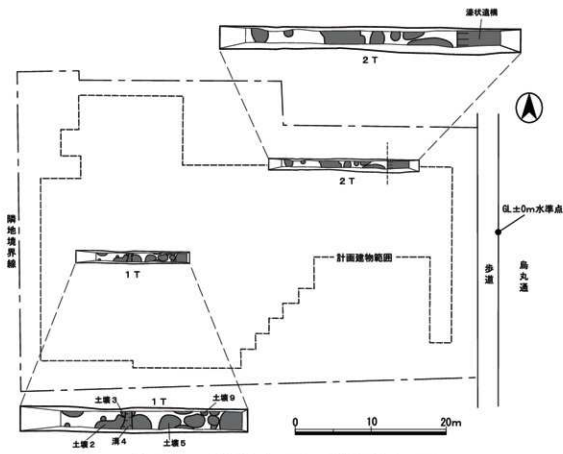


図16 トレンチ位置図 (1:500)・遺構平面図 (1:250)

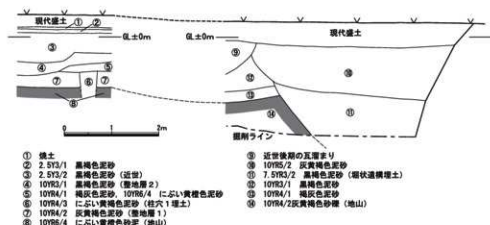


図17 調査区土層断面図 (左 1 T南壁, 右 2 T北壁 1:80)

3 遺物

遺物は土師器皿を中心に瓦質土器、陶器、青磁、金箔瓦が出土している。土師器皿を中心とした編年観については小森・上村両氏の平安京（京都）編年²⁷を参考にした。

土塚2出土土器 口縁端部が上方に立ち上がり三角形形状になる土師器皿（2）で、VI期のものと考えられる。

土塚3／溝4出土土器 口縁端部が外側に屈曲する青磁（18）が出土している。

土塚5出土土器 口縁部の器壁が厚い土師器皿（3・10）があり、X期のものと考えられる。

土塚9出土土器 土塚2と同じタイプの土師器皿（1・9）と瓦質土器大鉢（22）が出土している。VI期のものと考えられる。

1T包含層出土土器 掘削中に出土した土師器皿（19）で、口縁部外面に墨で「廿九日」²¹と書かれている。X期のものと考えられる。

1T整地層2出土土器 土師器皿が多く含まれており、口径から9cm台（4・5）、11～12cm台（6～8・11）、16cm台（12）の大きく3種類に分かれる。これらはX期中から新段階のものと考えられる。

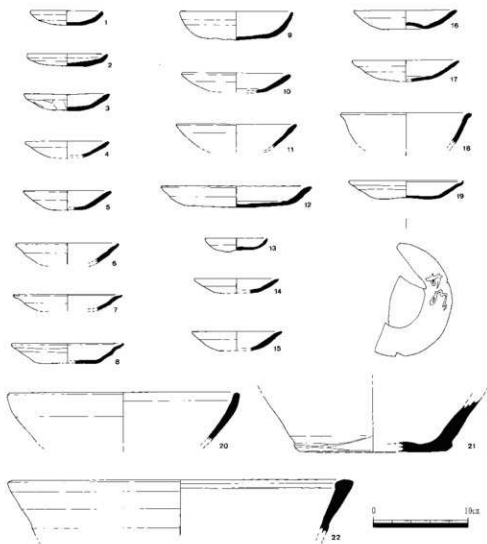


図18 出土土器実測図（1：4）

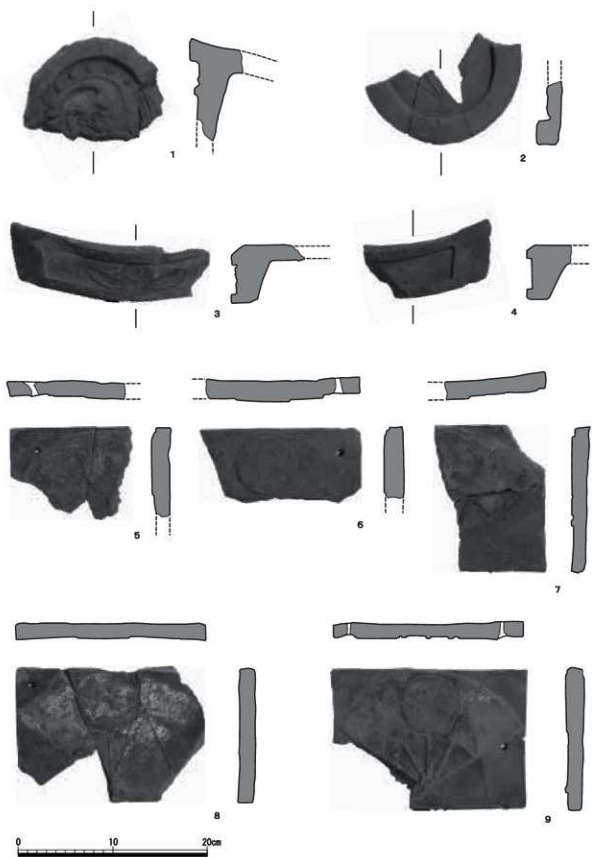


图19 出土金箔瓦火割图 (1:4)

他に中世陶器の売底部(21)が出土している。

2 T炭混整地層出土土器 2 T西端から東へ4.3mの位置まで広がる整地層で、土師器皿は口径から6cm台(13)、9cm台(14・15)、11cm台(16・17)の3種類に分かれる。他に瓦質土器の鉢(20)も出土している。X期中頃から新段階のものと考えられる。

漆状遺構出土金箔瓦 三巴文軒丸瓦(1)、扇に月丸⁶文方形飾り瓦(5)、鬘斗瓦の3種類の金箔瓦が出土した。1は、接着剤として下地に塗られた赤漆が残っており、金箔は周縁と三巴文・珠文の部分に貼られている。5は下地の赤漆や金箔を「扇に月丸」文部分に施している。扇に月丸文のある金箔瓦は、同じ北辺三坊五町跡で平成12年に実施した試掘調査からも出土している。ここでは、5と同じ方形飾り瓦の他、軒丸瓦(2)と軒平瓦(3・4)にも認められた。方形飾り瓦の寸法は規格性が高く、長辺約20cm、短辺約15cm、厚さ1.5~2.0cmである。また、5を含めた出土資料の多くは扇の上辺左右の外側部分に釘穴と見られる穴が開いている。

4 まとめ

試掘調査であり掘削は一部にとどめているため、当該地の全容を出土遺物や遺構から考えることは難しいが、土器類は平安京編年のⅧ期(13世紀頃)とX期(16世紀頃)の2時期に分かれている。また、金箔瓦は平成12年の試掘調査地点と同様に島丸通側で出土しており、屋敷地内での金箔瓦の利用状況を推定する一つの資料になると考えられる。

扇に月丸文は戦国武将佐竹氏の家紋とされる。軒丸瓦・軒平瓦・飾り瓦がセットで出土することから、当該地を含む北辺三坊五町を佐竹義宣の屋敷地と推定する意見も出ている⁷。しかし、伏見城で同文の出土した地点は毛利輝元の推定屋敷地⁸であり、家紋瓦の出土地を特定の武家屋敷と関連させるには文献等の確認も必要と考えられる。

(馬瀬智光)

註

- 1) 試掘調査 島丸通中立元北西角地(京都市内遺跡試掘調査概報 平成12年度)のNo.31地点 京都市文化市民局 平成13年)
発掘調査 堀町通中立元北東角地(内閣府遺跡発掘調査概要) 歴史文化財発掘調査概報(1974) 京都府教育委員会 昭和49年)、府立府民ホール(平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要)「京都市遺跡調査概報 第27冊(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 昭和63年)、一条通堀町南東角地(昭和49年に古代学協会が発掘調査、未報告)、島丸通中立元北西角地(試掘調査No.31地点で平成13年3月末まで関西文化財調査会が発掘調査、未報告)
- 2) 小森俊寛・上村憲幸 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 平成8年)
- 3) 漆器の髹装については京都大学の西田良平先生に御教示頂いた。
- 4) 丹羽善二 「家紋入陶瓦」(秋田書店 昭和46年)の呼称を参考にした。
- 5) 森島康雄 「発掘跡と城下町」『豊原考古と京都 築紫第・塙土壁と伏見城』(日本史研究会編 文壇閣 平成13年)
- 6) 山田邦和 「伏見城とその城下町の復元」(財5文庫中の論文)、長谷川 透 「伏見城跡発掘調査概要」『京都市遺跡調査概報』第8冊(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 昭和58年)

IV-1 平安京右京三条一坊十二町跡・壬生遺跡 No.35

1 調査経過

調査地は三条御前の交差点の東方北側で、従前資材置き場として利用されていた土地である。敷地のはほぼ中央を平安京の西堀筋小路が南北に走っており、建物予定地は小路跡と三条一坊十二町跡に跨っている。付近には藤原良相の西三条殿（百花亭）や、累代の後院である朱雀院などがあったとされるが、総じて水気の多い場所であったことが、既往の試掘調査や立会調査の結果から窺われ¹⁾、西隣地で実施した試掘調査でも、ほぼ全域が湿地状堆積の土地であることが分かっている²⁾。

今回、店舗新築の計画が届け出られたため、2002年9月2日、遺構の有無と密度を確認する試掘調査を実施した。



図20 調査位置図 (1:5000)

2 遺構

層序 1トレンチ西半での所見では、GL-114cmまで現代盛土、-130cmまで旧床土（耕土層は残っていない）、-150cmまで染付を含む近世湿地状堆積があり、以下、平安時代前期の遺物を包含する黒色砂泥層が-170cmまであって、その下層は少量の遺物を包含する暗緑灰色砂泥層となる。黒色砂泥層中の遺物は比較的多く、有機物もまた多く含んでおり、池内の堆積上である可能性もある。今回の試掘では地山を検出していないが、ボーリングステッキでの探索によれば、GL-210cmほどでそれと見られる砂層に当たる。なお、トレンチ東半では近世層がGL-190cmまで及んでおり、古い土層があまり残っていないかった。

遺構 1トレンチ西端近くで、南北溝1条を検出した。当該地が資材置き場となる以前の建物基礎が地中に残っていたため、東層は検出できなかったが、幅70cm以上、深さ40cm以上あり、断面形はU字形を呈するようである。黒色砂泥層を切り込んで成立しており、この層を池内堆積と見る可能性とは対立するが、位置的に見て西堀筋小路の西側溝であると考えられる。これに対応する東側溝推定位置では、前述のように近世の削平が深かった上、湧水のために精査できず、確認することができなかった。

2～4トレンチは、1トレンチの掘削によって当該地が湿地状であることが判明したため、盛掘りに切り替えたもので、深さも計画建物の基礎深に遺構の保護層を見込んだGL-130cmまでとした。その結果、2・3トレンチでは-130cmまですべて現代盛土で、4トレンチでは油混じりの溜

まり水が激しく噴き出したため、調査続行を断念し直ちに埋め戻しを行った。

3 遺物

遺物はコンテナに半分ほどが出上した。土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦・銭貨などがあり、そのほとんどが1トレンチ西半の黒色砂泥層からの出土である。図示したものは、5が1トレンチ東端の黒色泥上層出土である以外、すべてこの層の出土である。

1～3は土師器杯A。1は外面調整c手法で、2・3も粗雑ながらc手法の調整を施し、I期新段階に遡る³⁾。4～6は土師器碗Aで、粗いヘラケズリを施しており、I期のもものと認められる。7は土師器皿。外面調整c手法、I期中段階か。8は緑釉陶器碗。摩滅しているが、淡緑色の釉調を呈する。9・10は杯B蓋で、9は碗に転用されている。11は須恵器杯、12は土師器甕。13は平瓦であるが、ちょうど横に半分ほどの位置で割れており、甃斗瓦として使用された可能性がある。13は弘仁9年

(818) 初铸の富壽神寶。

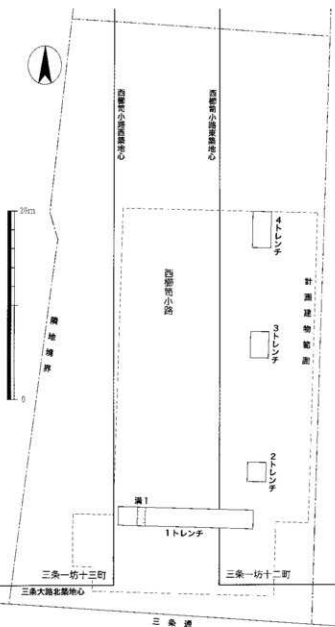


図21 トレンチ位置図 (1:300)

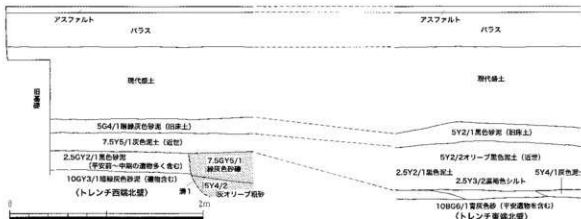


図22 土層断面図 (1:40)

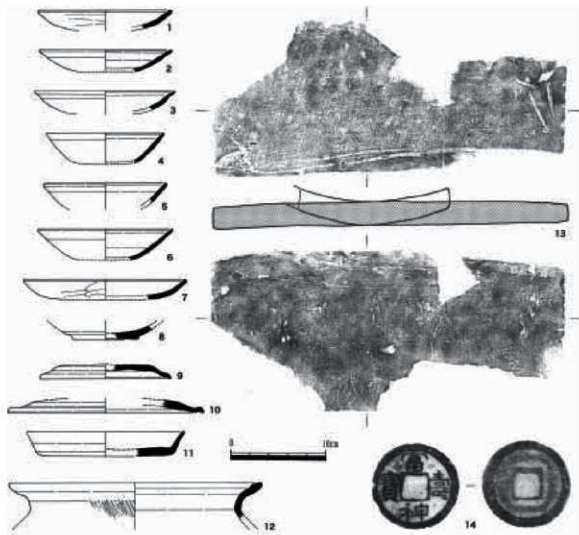


図23 出土遺物拓本・実測図（1：4，14のみ実大）

4 まとめ

今回の試掘では、周辺での知見と同じく、当該地も基本的には湿地であったことを確認し、また、西御筒小路西側溝と見られる溝を検出した。調査当日も敷地各所に資材が置かれていたため、この溝の延長を調査することはできなかったが、これについては将来の調査の機会を待つこととしたい。なお、今回は遺構検出面がGL-150cmであるのに対し、計画基礎深が100cmと浅かったため、遺構を地下に保存する形で予定通り建築が行われることとなり、また将来の掘削においては埋蔵文化財の取扱いに十分に留意するよう、事業者側に指導を行った。

（堀 大輔）

証

- 1) 山田邦和「石京全野の概要」(財)古代学協会・古代学研究所編「平安京概要」, 角川書店, 1994年
- 2) 京都市文化財局「京都市内遺跡試掘調査概報平成5年度」, 試掘調査一覧表No.31, 1994年
- 3) 小森俊寛・上村恵孝「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」(財)京都市埋蔵文化財研究所「研究紀要」第3号, 1996年

IV-2 平安京右京四條一坊十二町・十三町跡 No.7

1 調査経過

調査地は中京区千生森町29-1, 29-2で四條通西新道の交差点北側を占める。平安京の条坊制では、右京四條一坊十二町跡及び十三町跡に相当し、敷地中央部分を西櫛笥小路が通る。平安時代の占有状況は十二町に桓胤皇后の『西院』が、十三町は平安前期に大納言源貞邸が、同中期には源高明の『西宮』のあったことが知られる。

当該地は西櫛笥小路を確認する上で極めて重要な位置にあることから、建築面積1502.02㎡の集合住宅建設に先立ち試掘調査を実施した。試掘調査は、平成13年12月17日、平成14年2月4日、4月22日から26日までの計7日間実施した。調査の結果、西櫛笥小路東西両側溝及び中世の西新道に伴うと考えられる溝を確認することができた。



図24 調査位置図 (1:5000)

2 遺構

試掘調査は、建物解体時に西櫛笥小路西側溝の確認用に5箇所(1T, 3T~6T)、東側溝の確認用に1箇所(2T)の調査区を設定した。その後、工事工程との調整を進めた結果、調査区を4箇所(B区~D区)追加し、東西両側溝を連続して確認するために計画建物北端で断面観察(断面A)を行った。調査面積は合計104㎡となった。

層序 現代盛土は厚さ40cmから140cmあり、北で薄く南で厚く堆積する。現代盛土の下層には、灰褐色から暗青灰色砂泥じり泥上層が広がり、その下層に褐灰色から明黄褐色の色調を呈す砂礫層の地山がある。地山は北端では地表下0.75mと浅く、南端では地表下1.5mに達する。

溝1 B区からE区にかけて確認できる南北方向の溝で、最も明瞭なC区南断面では幅1.7m、深さ0.5mの規模をもつ。埋土は黄灰色から黒褐色の色調を呈する砂泥で、江戸時代の伊万里蕎麦猪口、平安時代の瓦小片等が出土した。

溝2 断面Aから2Tまで確認できる南北方向の溝で、幅2.8m、深さ0.3~0.8mの規模をもつ。埋土は褐灰色から黒色の色調を呈する砂泥で、植物遺体や室町時代前期の土器片が出土した。

溝3 幅1~3m、深さ0.5~0.8mの南北方向の溝で、オリーブ黒色から黒褐色の色調を呈する砂や砂礫を埋土にもつ。遺物はなく古い自然流路と考えられる。

溝4 調査地北端の断面A及び南端の1区で確認できた南北方向の溝で、幅0.8m～1m、深さ0.25mである。オリーブ黒色から黒褐色の色調をもつ砂や泥砂の埋土で、1Tから須恵器壺の胴部片が出土している。

溝5 溝4と同様、断面A及び南端の2Tでのみ確認した南北方向の溝で、幅0.8m～1.1m、深さ20～40cmであった。埋土は黒褐色砂泥で、植物遺体を含んでいた。

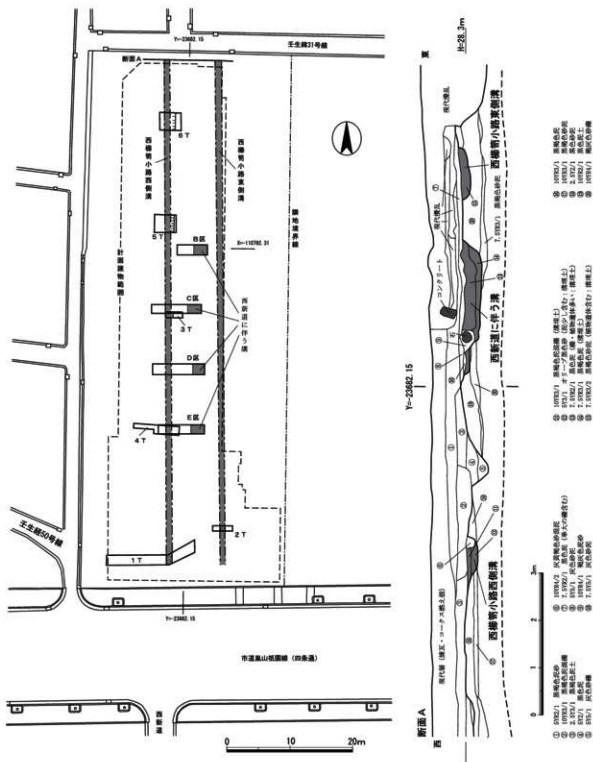


図25 遺構平面図 (1:600)・断面A (1:80)

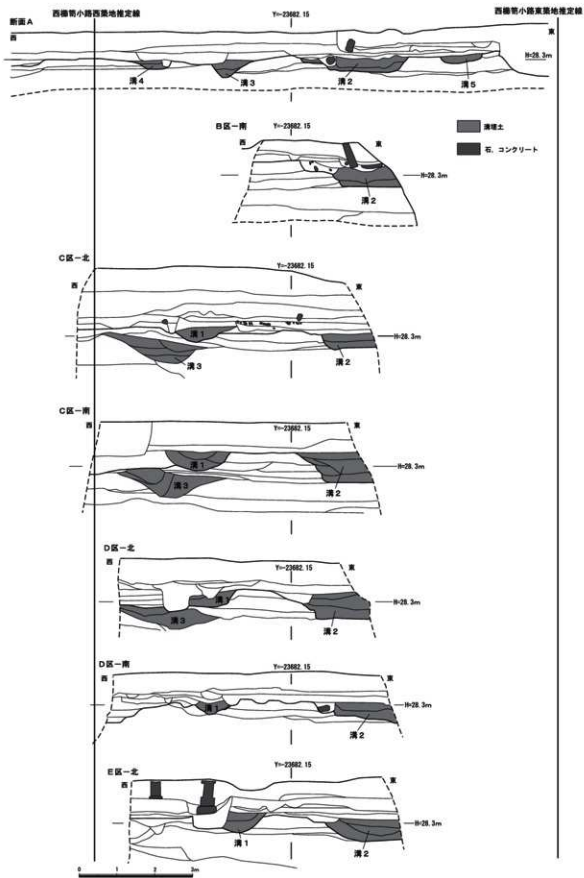


図26 土層比較図 (1:100)

3 遺物

溝1からは口縁部の仕上げが1段ナデの上師器皿(1)が出土した。平安京編年のⅧ期¹⁾に相当する。溝2からは土師器皿(2~7)、青磁(8)、瓦質羽釜(9)といった土器類や、櫛(10)や刀子の柄(11)といった木製品、大量の小枝やドングリの実などが出土した。溝2の上師器皿は平安京編年のⅧ期中からⅧ期新のものと考えられる。

4 まとめ

平安京の小路の幅は、その両側にある築地の心々距離から4丈(40尺：約12m)となる。築地心から溝心までの距離は各7尺、溝間の心々距離は26尺と推定される。推定西御筒小路西築地心と溝4の心々距離は1.5m、同東築地心と溝5の心々距離は2.5m、溝4・溝5の心々距離は8m、合計すると約12mとなり、築地心・溝心間の距離は異なるものの全体の小路規模と一致する。出土遺物は少なく時期の確定は困難であるが、溝4・溝5を西御筒小路の東西両側溝と考えたい。また、現在当敷地により南北に分断されている西新道と溝1・溝2の位置関係から、1400年前後の時期に西新道の起源となる道が成立していたことが明らかになった。(馬瀬智光)

註

- 1) 小森俊寛・上村恵草「京都市の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年)

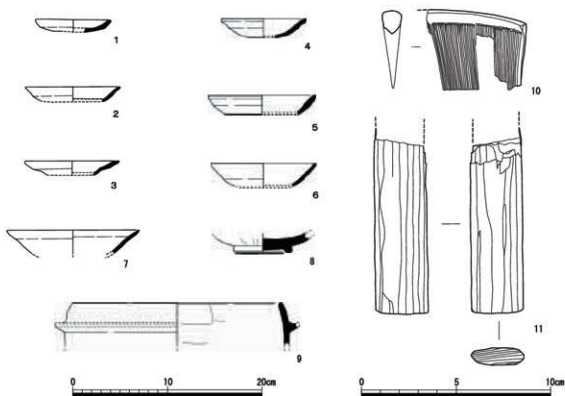


図27 出土遺物実測図(土器 1:4、木製品 1:2)

IV-3 平安京右京五条四坊十五町跡 No.38

1 調査経過

調査地は右京区西院東貝川町60番1, 61番1で、葛野大路通高辻の交差点から北約120mの場所にある。平安京の条坊制では、右京五条四坊十五町跡に相当し、敷地南半に五条坊門小路が通る。この十五町は平安時代後期になると摂関家の荘園である「小泉荘」の一部に含まれるとされる。

当該地は小泉荘の規模や性格を探る上で重要な立地条件を有しており、建築面積810.65㎡の店舗建設に先立ち試掘調査を平成14年11月20日に実施した。

調査の結果、平安時代の遺物包含層下に平安京の条坊とは異なる方位をもつ遺構群が検出された。この調査成果を理解した施工主は基礎の掘削深度について設計変更を了解したため、遺構の現状保存をはかることができた。

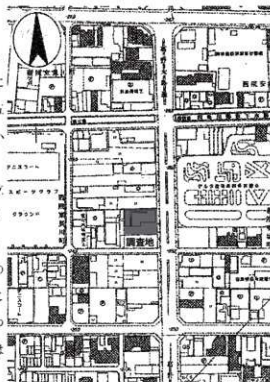


図28 調査位置図 (1:5000)

2 遺構

試掘調査は五条坊門小路の検出を目的に南北方向の調査区(1T)を設定した後、この調査区で確認された遺構の分布範囲を明らかにするために東西方向の調査区(2T)を追加した。

厚さ0.35mから0.5mの現代盛土を除去すると、耕作土が1から4層堆積していた。これら耕作土の下層には黄褐色小礫混泥砂層、平安時代の遺物を含む灰色シルト層などの包含層が続き、黄褐色系の色調を呈する地山に至る。地山の検出高は設計基準高を±0mとすると、-0.8mから-1.2mであった。

1Tでは北西から南西方向に流れる溝1、溝3の他、土壁2基を検出した。溝1は幅0.5mから0.6m、深さ0.2m、褐灰色泥砂の埋上をもつ。

2Tでは土壁5の他、遺構の細別が困難なほど密集



写真8 1トレンチ溝1検出状況(北から)

した遺構群が広がる他、湿地帯に移行する緩斜面に堆積した遺物包含層が認められた。精査した土壌5は、直径1.6m、深さ0.3mで、埋土は褐灰色泥土とにぶい黄褐色砂泥の2層に分かれる。

3 遺物

1 T 溝1 出土の上石器細片2点を除き、地山の上層に50cmの厚さで堆積する灰色シルト及びオリーブ灰色砂泥層から土師器細片、黒色土器、須恵器蓋・坏等が出土した。図示できたのは弥生時代中期の菱片(4)1点で、短い口縁部をもち外面にハケ状工具の調整痕が残る。

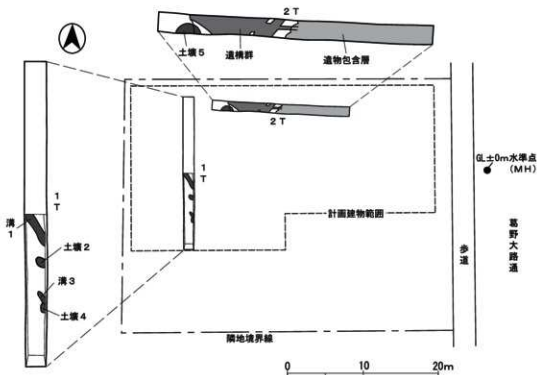


図29 トレンチ位置図(1:500)・遺構平面図(1:250)

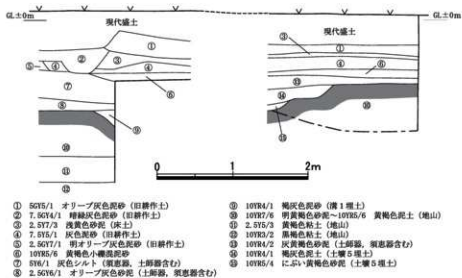


図30 調査区土層断面図(左 1 T西壁、右 2 T南壁 1:50)

2 T 土壌5では土師器甕及び須恵器の胴部等が出土し、遺構群からも須恵器甕の頸部から胴部にかけての破片が見つかった。しかし、図示した土器はこれらの遺構を覆っていた遺物包含層出土のものである。土師器甕(1)、灰釉陶器Ⅲ(2)、須恵器壺底部(3)、平瓶取手部分(5)の4点で、時期は、平安京編年の京都Ⅱ期頃¹⁾のものが多くと考えられる。

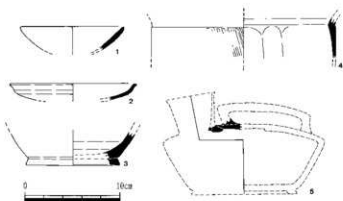


図31 出土遺物実測図(1:4)

4 まとめ

当該地の西及び南隣接地で平成10年度に試掘調査を実施している。西隣接地では河川の氾濫痕跡と五条坊門小路僅溝と考えられる溝が検出され、南隣接地では敷地のほぼ中央を二分して西が陸地、東が湿地帯に分かれることが明らかにされている。これらの調査成果と考え合わせると、河川の氾濫域と湿地帯に挟まれたわずかな微高地上に、平安時代まで連続して生活が営まれていたことがわかる。(馬瀬智光)

註

- 1) 小森俊寛・上村孝幸 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号(財)京都府埋蔵文化財研究所 1996年)

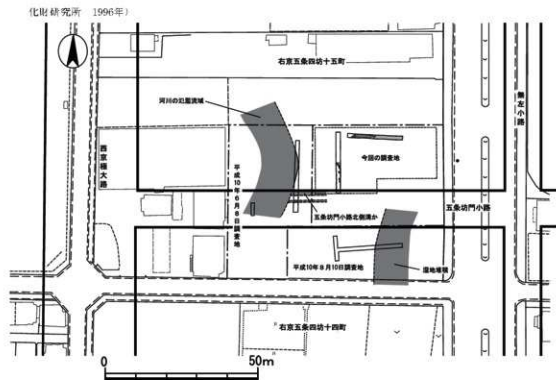


図32 周辺の調査状況(1:1,250)

IV-4 平安京右京八条二坊十六町跡・衣田町遺跡 No.45

1 調査経過

調査地は西大路七条の交差点を西に入った南側に、平安京の条坊復原では右京八条二坊十六町の北縁から七条大路路面に跨っている。十六町について「拾芥抄」西京図は「院御領」と記載し、また九・十・十五・十六町にかけて「(藤原)忠能朝臣宅」があったとする。この場合の「院」とは白河法皇を指すと考えられている¹⁾。

今回病棟の新築が届出されたため、2002年7月9日に試掘調査を実施した。

調査は築地側溝の検出を主眼として、3本のトレンチを設定して行った。その結果、2及び3トレンチで七条大路南側溝と考えられる東西溝を確認した。



図33 調査位置図 (1:5,000)

2 遺構

層位 調査対象地の西半には、最近までビルが建っており、東半は駐車場として利用されていた。ビルの跡地に設けた1トレンチでは、所々島状に元の地山面が残るもののほぼ全面が攪乱を受け、遺構面が失われていた。

これに対し、2及び3トレンチでは土層の残りが良好で、現代露上下に旧耕土までがほぼそのまま残っていた。基本的な層位は、佐井東通のマンホール中心を仮ベンチマークとした時、-40～-50cmで旧耕土、-60cm前後で土器片を包含する整地上層、-80～-110cmで砂礫または砂の地山となる。3トレンチの整地土層はおおよそ上下2層に分かれるが、2トレンチでは攪拌されたように泥ざり合っていて分層できなかった。いずれも平安京編年V期²⁾の遺物を包含しており、後述の溝1との層位関係からも平安時代末～鎌倉時代の整地と理解される。遺構は、2トレンチで3条、3トレンチで1条の東西溝を、すべて地山面で検出した。

溝1 2・3トレンチの北端で検出した。検出面での幅は2トレンチで83cm、3トレンチで122cmあり、両者で埋土が若干異なる。3トレンチ部分での埋土は砂と泥土の互層に細分が可能で、幾分かの流水があったことが窺われる。これを七条大路南側溝と見るにはやや推定築地心に寄りすぎている感があるが、当該地西方で1981年に実施された調査³⁾では、築地心に対して同様の位置で側溝と大路路面を検出しており、これも同じく南側溝と捉えて間違いないだろう。埋土中には黒色土器片など古い遺物も含まれるが、V期に下る土師器も包含しており、平安時代末頃

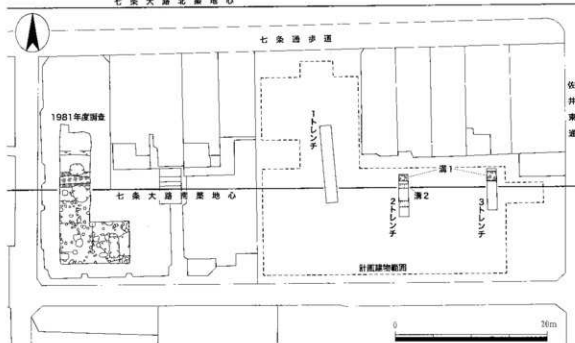


図34 トレンチ位置図 (1:400)

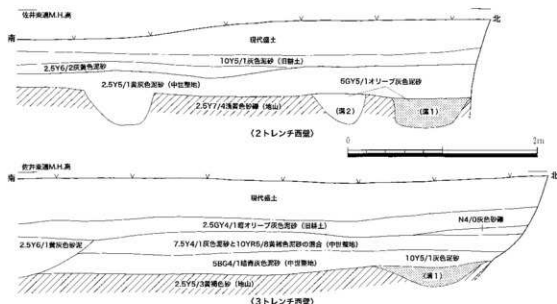


図35 土層断面図 (1:40)

に埋没したものと思われる。

溝2 2トレンチの溝1のすぐ南側に検出した。幅60cmで、埋上は溝1と同一であるが、築地内溝とするには溝1との間隔が狭すぎる。3トレンチではこれに相当する遺構は見出せず、その性格はよく分からない。

3 遺物

遺物の出土は多くなく、遺物袋2つ分に満たない。ほとんどが土師器の皿で、須恵器、瓦質土器が若干混じる。また、ほぼ全てが整地土層出土で、図示したものは1・4～6が2トレンチ

整地上（黄灰色泥砂）層，2が3トレンチ上層整地土（灰色泥砂・黄褐色泥砂混合）層，3が同下層整地土（暗青灰色泥砂）層，7が2トレンチ溝1出土である。

1は土師器皿N。やや強めのヨコナデで、底部から立ち上がりへの変換点を作り出す。Ⅵ期中段階か。2は土師器皿N。2段ナデで口唇部は断面三角形に取める。Ⅴ期新段階。3は土師器皿Nで、Ⅴ期新段階に収まるものであろう。4は土師器皿N。外面1段ナデで内面の口縁下部を強くヨコナデしており、Ⅴ期からⅥ期にかかる頃のものであろう。5は瓦質上器の羽釜。内面を板状工具の木口でヨコナデした後ナデで調整する。6は須恵器鉢。平安中～後期。7は須恵器壺。溝1出土資料で唯一図化しうるものであった。

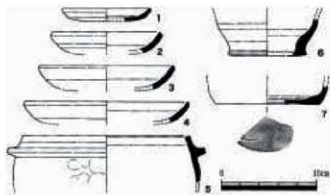


図36 山土遺物実測図（1：4）

4 まとめ

以上のとおり、今回の試掘では、1981年調査で検出した七条大路南側溝の延長を確認することができた。出土遺物からは鎌倉時代初め頃にその機能が失われ、ほどなくして周辺一帯が整地されたことが窺われる。この整地は地山が砂や砂礫という状態を改善するためのものと考えられる。

（堀 大輔）

註

- 1) 山田邦和「石京全町の概要」(財)古代学協会・古代学研究所編「平安京研究」(角川書店), 1994年
- 2) 小森俊寛・上村憲幸「京都の都市遺跡から出土する土器の断片的研究」(財)京都市歴史文化財研究所「研究紀要」第3号), 1996年
- 3) 吉崎 伸「石京八条二坊(2)」(財)京都市歴史文化財研究所「昭和56年度京都市歴史文化財調査概要(発掘調査編)I」, 1983年

V-1 長岡京左京五条三坊十六町跡 No.76

1 調査経過

調査地は、外環状線と西羽東師川の交差する地点から西へ250mの、南北に細長い敷地である。長岡京復原条坊においては左京五条三坊十六町にあたり、30mほど東には東三坊大路が通る。北方150mには中世の羽東師菱川城跡が所在し、すぐ東側は古墳後期の集落跡である羽東師遺跡の周知範囲となっている。周辺の既往の調査では、西羽東師川東側の外環状線建設に伴う調査¹⁾や、南方の工場用地内での調査²⁾において、遺構の粗密はあるものの多数の掘立柱建物跡等を検出している。

この度、当該地に共同住宅の新築が計画されたため、2002年8月7日に試掘調査を実施した。その結果、遺構・遺物ともに希薄であったが1箇所で柱列を検出したことから、その規模を確認する目的で同27日に追加調査を行った。図39及び40は2回の調査トレンチを図上で合成したものである。

2 遺構

層位 調査時の現状は畑で、北側を走る外環状線の歩道よりもおよそ110cm低くなっていた。層序は攪乱もなく良好に残っており、トレンチのどの地点でも同じ様相を示す。上から耕作土（厚さ17cm）、床上（17cm）、灰黄褐色泥砂（14cm、平安前期遺構面か）、黄灰色泥砂（17cm、僅かに遺物包含）と続き、地山は灰色の泥土である。ほとんどの遺構は地山面上で検出した。

掘立柱建物 1 1回目の試掘でP1～P3を検出し、追加調査時にP4・5を確認した。P1の南側でP4に対応する横持柱が認められないことから、南北2間・東西3間以上の東西建物であることが分かる。また、少なくとも北側と南側には庇がつかない。柱の掘形は一辺70cmほどの方形で、柱当たりは直径20～25cmほど、柱の心々距離は東西・南北とも2.56m（約8.5尺）等間である。柱

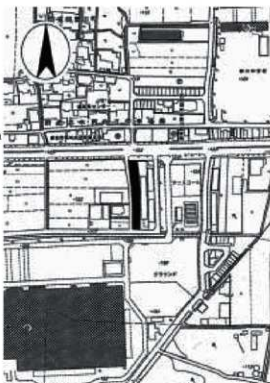


図37 調査位置図 (1:5,000)



写真9 掘立柱建物1 西側柱列検出状況(南から)

筋は北で若干東に振る。掘形埋土から年代の分かる資料の出土はなかったが、長岡京期のものと考えられる。なお、P6は1～5の柱穴と埋土が共通し、ほぼ同時期のものと思われるが、位置的に同一の建物とはならない。

土壌7 P5の南3.5mで検出した不整形のもので、その中央から須恵器壺・杯、土師器甕、平瓦片など、長岡京期の遺物がかたまっていた。

壺はほぼ完形に復元できるが、既に割れた状態で埋まっていた。遺物が集中するところは埋土が周囲と異なっており、40cm×25cmほどの長軸を東西に向けた長方形の輪郭が追えることから、箱のようなものに入れて埋めた可能性がある。地鎮遺構かとも考えたが、破片だけの壺や平瓦もあり、その性格はよく分からない。

土壌8 直径70cmほどで錐鉢状の浅い穴であるが、調査時に重機で掘削した上層の灰黄褐色泥砂と埋土が似ており、上層遺構の残欠と考える。

これらの他、土壌7のすぐ東側、トレンチ壁面の灰黄褐色泥砂層中より、重機掘削中に長岡京期ないし平安初期の遺物がかたまっていたが、壁面に遺構断面は認められず、包含遺物と考えている。同層はこの地点以外では全くの無遺物である。

3 遺物

出土遺物のうち、図化しうるものを図41に掲げた。1～5が灰黄褐色泥砂層出土、6～8が土壌7出土である。

1・2は土師器甕。1は外面タテハケ、口縁内面ヨコハケで調整し、口縁端部は大きく丸く突起させる。2は口縁内面に目の粗いヨコハケを施す。3は須恵器壺A蓋で、宝珠形つまみがつくと思われる。4は須恵器鉢D。全体の1/3ほどに復元できた。5は須恵器の甕で、外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕の上を粗くナデて

いる。6は須恵器杯A。焼成が甘く、口縁残存率1/10ほどの小片である。7は須恵器壺G。ほぼ完形に復元できたが、壺としての形を保ったまま埋められたのではないことは上述のとおりである。8は平瓦。一枚作りで、凸面側には凹型整形台の痕跡が明瞭に残る。

4 まとめ

今回検出した掘立柱建物は、その所属時期についての物的資料を欠くが、南西の工場用地の発



図39 トレンチ位置図 (1:500)

掘で検出された建物群が今回と同じく北で東に振れる方位を持ち、これらが長岡京期と考えられる²⁾ことから同様のものと捉えている。水気が多く、本来居住に向かない泥土上に建てられていることも、都城の宅地班給という強制力が働いたがためのものであろう。

(堀 大輔)

註

- 1) 長宗節一・吉崎伸・鈴木廣司「長岡京左京四条三・四坊」(財)京都市埋蔵文化財研究所「昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概報」, 1991年
- 2) 鳥羽離宮跡調査研究所「日本尋究公社工場地内埋蔵文化財発掘調査概報」, 1977年
- 3) 註2概報では建物群の年代を平安時代に下げて捉えているが、出土遺物や、周辺の調査成果を含めた現在の見地からは長岡京期とするべきものである。

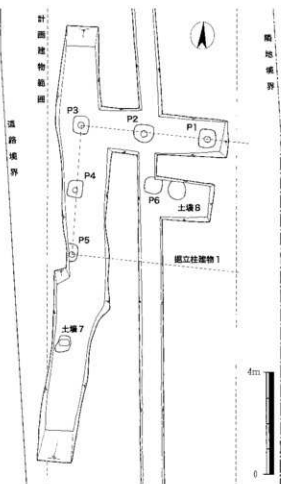


図40 遺構平面図 (1:130)

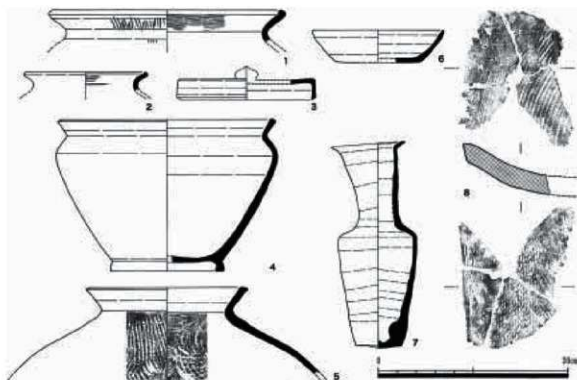


図41 出土遺物拓本・実測図 (1:4)

V-2 北野廃寺・北野遺跡 No.54

1 調査経過

調査対象地は、北区北野上白梅町7の西大路通に面した敷地で、基礎建物跡などを検出した第2次調査地¹⁾の北隣、1999年度試掘調査地²⁾の東隣に当たる。今回ここで店舗新築が計画されたため、2002年11月1日に試掘調査を行った。その結果、建物計画範囲に中世以前の遺構面が良好に残っていることを確認したが、計画の基礎が遺構面より浅かったため、さらに十分な遺構保護層を確保するよう指導を行い、施工時にも立会調査を実施した。



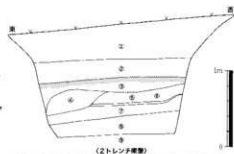
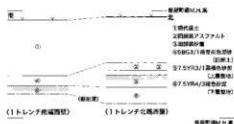
図42 調査位置図 (1:5000)

2 遺構

周辺における既往の調査から、当該地においても何らかの遺構が存在することは確実視されたため、建物計画範囲に設けた1トレンチでは、調査の主眼を遺構面の深さの確認に置いた。

遺構面の残りは極めて良好で日立った攪乱は認められない。トレンチ北端での所見では、敷地北側の笹屋町通にあるマンホールを仮ベンチマークとしたとき、-85cmで中世と思われる上層整地層(⑤層)、-101cmで時期不詳の下層整地層(⑥層)となる。トレンチ掘削を最小限にしたため、これ以下の層位は確認していない。トレンチ南端では上層整地層は失われていて、旧耕土の直下-99cmで下層整地層を検出した。この下層整地層上面において、土壌1基、北東-南西方向の溝1条を検出したが、これも平面検出にとどめたため、詳細は不明である。

2トレンチは、店舗の看板設置予定地点に設けたもので、計画基礎が小規模かつ深いため、こちらは地山面まで掘り下げた。仮ベンチマークに対し-136cmと-146cmで、それぞれ遺物を多く含む2層の整地土(③・⑤層)となるが、特に⑤層には土器や瓦片が多量に包含されていて、1トレンチの整地土とは異なった印象を受ける。また、③層がほぼ水平をとっているのに対し、⑤層はその下の⑥層とともに傾斜が高く、外側に低くなっている。地山



①遺構面跡 ②⑤Y93/1(遺構面跡) ③⑤Y93/1(遺構面跡) (調査1) ④⑤Y93/1(遺構面跡) (調査2) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査3) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査4) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査5) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査6) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査7) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査8) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査9) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査10) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査11) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査12) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査13) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査14) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査15) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査16) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査17) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査18) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査19) ⑤Y93/1(遺構面跡) (調査20)

図43 土層断面図 (1:50)

直上に積まれた土層であるだけに、寺院存続時の空間構成を反映している可能性もあるが、何分小規模なトレンチなので、過大評価はできない。⑤層上面で東側への落ちを認め、埋土(④層)中から瓦片など多数を採集した。この落ちは後日施工時の立会調査により、北側で閉じる土塼状の遺構であることが判明した⁹⁾。

3 遺物

採集した遺物のほぼすべては2トレンチ出土の古代瓦である。破片数84片、重量16.94kg分があり、ほとんど丸・平瓦である。平瓦のタタキ目で見ると、縄タタキ27点・8.97kg、格子タタキ6点・0.87kg、ハケメ2点・0.61kg、ナデ消し1点・0.47kg、不明32点・1.64kgで、多くは奈良時代以降のものと思われる。図45には1点のみ出土した軒平瓦を掲げた。煙し風に仕上がったやや軟質の瓦で、下外区に「西」銘をもつ西寺出土瓦〔平安京古瓦図録¹⁰⁾ No.305〕などと同范である。平安前期。凸面はタテハラケズリで平滑に仕上げ、外区珠文部分などに范傷が目立つ。

4 まとめ

今回の調査は遺構面の確認を行っただけのものであるが、調査区の多くが擾亂を受けていた14次調査¹¹⁾などに比べると、かなり良好に遺構面が遺存していることが判明した。基壇建物跡に隣接する伽藍中廊下であるだけに、将来、より大規模な土木工事が計画された場合には、本格的な発掘調査が不可欠であると考えられる。

(堀 大輔)

註

- 1) 梅川光隆「北野楽寺跡-ハイブねむの木建設に伴う発掘調査の概要-」。(財)京都市埋蔵文化財研究所、1982年
- 2) 馬淵智光「北野楽寺跡」(京都市文化市民局 京都市内遺跡試掘調査概報 平成11年度), 2000年
- 3) 看板設置時の立会調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した。
- 4) 平安博物館編「平安京古瓦図録」, 藤山房出版, 1977年
- 5) 菅田 薫「北野楽寺第14次調査」(京都市文化観光局「北野楽寺・北白川楽寺発掘調査概報」), 1990年

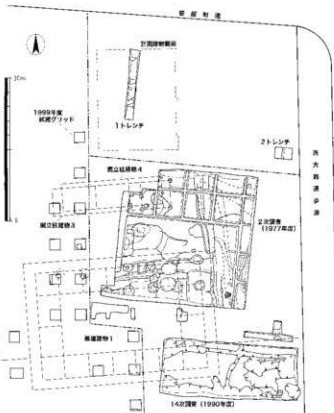


図44 トレンチ位置図 (1:500)

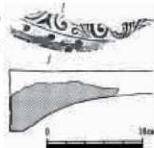


図45 出土軒平瓦 (1:4)

VI 試掘調査一覧表

H13年度1～3月

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
大極殿院跡東方・聚楽遺跡	上京区小山町908-32	1/28・ 2/12～14	GL-0.5mで平安時代前期の整地層。さらに1Tでは同時期の土壌2基、2Tでは同じく土壌1基と土器萌芽り2箇所を検出する。試掘調査を延長する。本文3頁。	23 m ²	1	01K407

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
四条三坊十町跡	中京区烏丸六角下七観音町629-1,633他	2/5	GL-2.5mで室町時代の土壌1基を検出。敷地の奥は近世の現状遺構。	46 m ²	2	01H501
四条四坊三町跡	中京区錦小路通東洞院東入西魚屋町617他	1/17	完全な削平により、遺構・遺物とも全くなし。	68 m ²	3	01H355

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
一条二坊十二町跡	中京区西ノ京内町21-1,21-3他	1/15	近世以後の擾乱により、遺構面は完全に削平されている。	51.5 m ²	4	01S352
二条三坊十三町跡	中京区西ノ京藤ノ木町11	2/1	GL-0.8mで平安前期の土壌1基を検出。	19 m ²	5	01H494
三条二坊七町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京原町111-2	1/9	GL-1.0～1.2mで地山。地山上で船立柱建物跡ほかを検出。設計変更を指導する。	19 m ²	6	01H419
四条一坊十二町・十三町跡	中京区壬生森町29-1,29-2	12/17・2/4・ 4/22～4/26	西極筒小路東西両側溝を検出する。試掘調査を延長する。本文22頁。	104 m ²	7	01H350
四条四坊六町跡	右京区山ノ内山ノ下町24	1/11	耕作土の下層に整地層を認めるが、顕著な遺構は発見出来ず。	25 m ²	8	01H430
四条四坊十二町跡	右京区西院安塚町1	1/22・24	11箇所トレンチを設けるが湿地状の軟弱な泥土の堆積を確認したのみ。	305 m ²	9	01H409
六条四坊十町跡	右京区西院月双町104	3/20	GL-1.5m以下、氾濫堆積。	13 m ²	10	01H556
八条二坊九町跡・农田町遺跡	下京区西七条南农田町96, 97	2/7	GL-0.5mで灰色砂礫の地山上で柱穴2基検出。ただし大部分は既存施設による擾乱。	30 m ²	11	01H398

大秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
音戸山古墳群	右京区大秦中山町(宇多野ユースホステル)	3/11・12	調査した範囲内においては、古墳に関連する遺構・遺物とも検出なし。立会調査を指導する。	38 m ²	12	01S507
段ノ山古墳	右京区梅津段町30-5	2/27	GL-1.0mで旧耕土。以下1.7mまで中世土器細片を含む整地層。古墳に関連する遺構・遺物は確認できず。	7 m ²	13	01S519

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
北野遺跡	北区小松原南町33	3/28	GL-0.5mで地山面。時期不明の土壌1基と近世の東西溝1本のみ検出。	22 m ²	14	01S508
植物園北遺跡	左京区南野々神町1	1/23	1トレンチではGL-1.8mで時期不明の溝。2トレンチではGL-1.5mで時期不明の土壌を検出する。	29 m ²	15	01S415

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
白河北殿跡	左京区聖護院川原町4-14	3/25	GL-1.5m以下に平安時代後期の瓦を含む整地層を確認。ほかに顕著な遺構なし。	28 m ²	16	01R538

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
法興院跡	中京区河原町二条上る清水町338-4他	3/1	GL-1.65～1.8mで砂礫の地山、	56㎡	17	01S535

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
鳥羽離宮跡	伏見区中島前山町52,53	3/18	GL-0.75m以下、流水堆積や湿地堆積が続く。	25㎡	18	01T522
下鳥羽遺跡	伏見区竹田松林町4,5,6,7,8	2/25	GL-2.6mまで掘り下げが、湿地堆積のみ。	17㎡	19	01S502

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
草嶋館跡	西京区川島玉頭町67-2	1/9	GL-0.88mで地山、検出遺構なし。	12㎡	20	01S428

長岡京地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
長岡京跡	西京区大原野上里南ノ町及び大原野石見町地内	3/14	調査区全面で河川の氾濫堆積。	29㎡	21	01NG002

H14年度4～12月

平安宮

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
掃部寮跡	上京区仁和寺街道六軒町西入西番町139-1,140-1,3	10/23	敷地の南端において、推定掃部寮北面築地の北側溝をGL-0.5mで検出する。本文9頁。	50㎡	22	02K285
中和院跡	上京区千本通下立売上る十四軒町395	10/30	GL-0.4mで平安時代前期の土器や瓦を含む整地層。GL-0.6mで一辺が約3m、深さ約1mの土壕とこの土壕によって削平された深さ1.2m、幅推定1.5mの東西溝を検出する。本文11頁。	38㎡	23	01K477
西院跡	上京区下立売通千本東入下る中筋町928他	9/30	GL-0.9mで推定、西院西築地の基底部と内溝を検出する。発掘調査を指導する。	18㎡	24	02K232

平安京左京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
一条二坊六町跡	上京区下立売通堀川西入西橋詰町290, 290-1	4/3	GL-0.9mで近世盛土、GL-1.6mで砂礫の地山。ただし敷地の大半は擾乱。工事中の立会調査を指導する。	16㎡	25	01H540
三条一坊四町跡	中京区西ノ京南聖町13-2,14,24-14	9/11	河川氾濫及び旧建物の擾乱により、朱雀大路及び梵学院の遺構なし。	53㎡	26	02H251
三条二坊十四町跡	中京区御池通油小路東入石橋町418、小川通御池下る意屋町440他	6/17	GL-0.9mで中世以前の遺構検出。発掘調査を指導する。	25㎡	27	02H093
四条二坊一町跡	中京区三条通猪熊西入御供町300,302、新シ町三条下る下一文字町316、猪熊通三条下る三条猪熊町650-1,651-2	10/3	GL-1.1mの地山上で三条大路南側溝を検出。	29㎡	28	02H212
四条三坊九町跡・鳥丸御池遺跡	中京区室町通三条下る鳥帽子屋町481-1他2筆	10/24	GL-1.16mで地山を検出したが、ほぼ全面で地山面以下まで近世擾乱。	49㎡	29	02H115
六条二坊七町・八町跡・鳥丸綾小路遺跡	下京区猪熊通五条上る柿本町587	9/25	GL-0.72～1.58mで中世末の土壕・溝などを検出。設計変更を指導する。	70㎡	30	02H225
六条四坊十三町跡	下京区五条通寺町西入御影堂町14他	12/16	整地層は認められるもの。近世以後の井戸等の掘削による変化が著しい。	36㎡	31	02H365
名勝沙成園	下京区下数珠屋町通間之町東入玉水町	7/24	沙成園成立以前は、河川の氾濫堆積。一部で時期不明の遺物包含層を認める。	3㎡	32	14N003
八条一坊十六町跡	下京区和気町6-1	12/13	GL-0.6mで堀小路北側溝及び細苅小路東側溝に関連する遺構を検出。発掘調査を指導する。	26㎡	33	02H406

平安京右京

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
二条三坊十二町跡・西ノ京遺跡	中京区西ノ京小堀池町18-6他	5/7	GL-0.93mで中世整地土, GL-1.12mで湿地状堆積(池?)。	25 m ²	34	02H030
三条一坊十二町跡・壬生遺跡	中京区西ノ京東月光町9-9-1	9/2	GL-1.5mで平安前期の遺物を多く含んだ湿地状堆積。西郷寺小路西側溝を検出。立会調査を指導する。本文19頁。	46 m ²	35	02H213
四条四坊十町跡	右京区山ノ内西裏町1他2筆	11/7	全体が湿地堆積。予定地東寄りでは平安初期の遺物を含む流路散条を検出。	19 m ²	36	02H318
四条四坊十一町跡	右京区山ノ内池尻町14-3	4/8	GL-1.26mで砂礫・シルトの流水堆積。	16 m ²	37	01H550
五条四坊十五町跡	右京区西院東貝川町60-1,61-1	11/20	GL-1.15mで湿地状堆積。調査地北半は基礎層前深度がGL-0.15mと浅く盛土内のため、確認調査を行っていない。設計変更を指導する。本文26頁。	55 m ²	38	02H340
五条四坊十六町跡	右京区西院東貝川町24,25,43	7/18	GL-1.1m以下、湿地状堆積。	25 m ²	39	02H050
六条四坊十町跡・西京極遺跡	右京区西院月双町97,98	7/17	西京極遺跡の西側境界を明らかにした。	69 m ²	40	02H164
七条二坊十町跡	下京区西七条比輪田町6-1	10/9・11	GL-0.5mの現代盛土直下から氾濫堆積。南西隅を除く敷地のほぼ全域が攪乱と思われる。	22 m ²	41	02H256
八条一坊二町跡・七町跡	下京区西七条東久保町55他	4/15	土壌改良の影響著しく、遺構・遺物ともし。なし。	95 m ²	42	01H573
八条一坊七町跡	下京区西七条東久保町55-3	7/29	GL-0.5mの耕土下で時期不明の土壌1基を認められたものの、旧工場の基礎除去に伴う攪乱が多く、他に顕著な遺構・遺物は認められなかった。	91 m ²	43	02H142
八条二坊四町跡	下京区梅小路西中町42-1,42-3	6/5	GL-0.6-0.8mで平安前期の遺物を含む黒褐色泥砂の整地層。	15 m ²	44	02H063
八条二坊十六町跡・衣田町遺跡	下京区西七条南衣田町3他	7/9	GL-0.5mで鎌倉時代整地層, GL-0.8mの地山上で七条大路南側溝検出。本文29頁。	30 m ²	45	02H145
八条四坊十四町跡	右京区西京極芝ノ下町4-1	8/19	GL-1.15m以下、氾濫堆積。	16 m ²	46	02H210
九条一坊五町跡	南区唐橋花園町7	6/26	耕土・床土下の明黄色色砂泥層で南北及び東西の耕作溝を検出。	20 m ²	47	02H120

太秦地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
広沢古墳群	右京区嵯峨広沢池下町24	10/28	古墳の痕跡などは、発見できなかった。	88 m ²	48	02S021
仁和寺院家跡	右京区常盤音戸町11-11	6/3	GL-0.2-0.7mで花崗岩の岩盤。	31 m ²	49	01S575
一ノ井遺跡	右京区太秦一ノ井町3-3	5/22	GL-0.8mで平安時代の柱穴や東西溝を検出する。大半は旧建物の基礎による攪乱。	56 m ²	50	02S038

洛北地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
岩倉忠在地遺跡	左京区岩倉中町244,245-3	7/1	GL-1.6mで暗オリーブ灰色粘土の地山。	22 m ²	51	02S094
植物園北遺跡	北区上賀茂松本町40,41-1,41-2,48	9/19	須惠器小片1片が床土内から出土しただけで、遺構については何も発見できず。	20 m ²	52	02S096
植物園北遺跡	北区上賀茂岩ヶ垣内町20,21-1の一部	7/22	耕土直下で摩耗した須惠器や平瓦、土師器など敷点を採取する。	39 m ²	53	02S077
北野庵寺・北野遺跡	北区北野上白梅町7	11/1・5	能原町通踏面高GL-0.85mで中世整地地面。土壌・溝など検出。本文35頁。	16 m ²	54	02S328
北野遺跡	北区北野西白梅町6-2	11/5	ほぼ全面が現代攪乱。一部、GL-0.55mで浅黄色粘土の地山検出。	34 m ²	55	02S263
相国寺旧境内	上京区上御堂前通寺町西入上御堂馬場町363	9/27	GL-0.2mで室町後半の土師器細片を含む整地層, GL-0.4mで黄褐色色砂泥(ベース)。ベース面で土師器細片を含む円形土壌や不定形土壌を検出する。	73 m ²	56	02S303

北白川地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
北白川庵寺	左京区北白川山田町68	5/17	旧河川の岸付近にあり、北白川庵寺に伴う瓦片が認められた。近代の阿闍利道に伴う側溝も検出。	18㎡	57	02S057
北白川庵寺	左京区北白川堂ノ前町39-7	5/29	GL-1.0m以下で黒色泥砂層、GL-2.1mまで掘削するが遺構・遺物は発見せず。	9㎡	58	02S045
六勝寺跡 (得長寿院跡)	左京区岡崎徳成町10-3,10-11,10-12	8/26	敷地の大半が、旧建物の基礎工事による擾乱の影響を受け、層序が乱れ、得長寿院に関する遺構は認められなかった。	4㎡	59	02R223
白河街区跡	左京区岡崎円勝寺町64-1他18筆	10/2・11/11	幅4m以上、深さ2m以上の南北方向の溝状遺構を検出。発掘調査を指導する。	22㎡	60	02S297

洛東地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
鳥辺野	東山区泉涌寺山内町27,34-1,36の一部	6/12	近世の寛文年間再興時に広げられた境内地か。	27㎡	61	01S207
山科本願寺南殿跡	山科区音羽伊勢宿町40の一部	6/7	北側道路高-0.42～-0.62mで地山。溝状の落ち込み2条検出。工事中の立会調査を指導する。	11㎡	62	02S053

伏見・醍醐地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
伏見城跡	伏見区桃山町伊賀50	7/10・11	GL-1.0mで伏見城造成土。GL-2.0mで地山。	24㎡	63	02F157

鳥羽地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
鳥羽離宮跡	伏見区竹田西樋ノ井町9の一部	9/18	GL-1.4m以下、湿地堆積。	25㎡	64	02T271
鳥羽離宮跡	伏見区竹田田中宮町16	7/26	耕土・床土の下は鴨川の後背湿地。	21㎡	65	02T187
鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	伏見区竹田東小屋ノ内町7	9/9・25	GL-1.48mで鳥羽離宮期の南溝1条を検出。	36㎡	66	02T274
鳥羽離宮跡	伏見区竹田西小屋ノ内町83,6,10	10/21・22	敷地の南端部で東西方向の溝状遺構(金剛心院の推定北限溝)を確認したことにより、発掘調査を指導する。	187㎡	67	02T308
鳥羽離宮跡	伏見区中島秋ノ山町54	7/15	GL-2.4m以下で青灰色泥土の湿地堆積。	13㎡	68	02T171

南・桂地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
唐橋遺跡	南区吉祥院九条町21,22	6/19	GL-1.7m以下、氈氈堆積や湿地堆積。	20㎡	69	02S083
史跡名勝嵐山	西京区嵐山上河原町1-4	12/25	GL-0.2m以下、河川の氈氈堆積。	9㎡	70	14N17
史跡名勝嵐山	西京区嵐山谷ヶ辻町12-2,12-5	10/7	GL-0.90mで時期不明の整地土層、GL-1.10mで地山。	2㎡	71	14C14
中久世遺跡	南区久世中久世町3丁目64, 65	5/20	弥生時代の湿地帯と陸部の境界付近を検出。中久世遺跡の範囲を北に延長する必要あり。	25㎡	72	01S551

長岡京地区

遺跡名	所在地	調査日	調査概要	調査面積	番号	受付番号
長岡京跡	南区久世東土川町297	10/17	GL-1.4m以下、湿地堆積。	47㎡	73	02NG261
長岡京跡	南区久世東土川町126-2,3,4	5/27	GL-1.75m以下、シルトの厚い堆積。	10㎡	74	02NG042
長岡京跡	伏見区羽束師志水町182-1他	12/24	GL-1.0mで長岡京期の土壌・柱穴・溝等を検出する。設計変更を指導する。	80㎡	75	02NG400
長岡京跡	伏見区羽束師藤川町302-1	8/7・27	GL-0.65mで長岡京期の掘立柱建物1棟、柱穴1基、土壌2基を検出。試掘調査を延長する。本文32頁。	85㎡	76	02NG207

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちようさいりょう							
書名	京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	長谷川行孝・馬瀬智光・堀 大輔							
編集機関	京都市埋蔵文化調査センター							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安宮大極殿院 跡 東方・聚楽遺跡	京都府京都市上京区 小山町908-32	26100	232	35度 0分 56秒	135度 44分 47秒	2002/1/28 ~2/14	23㎡	個人住宅
平安宮掃部寮跡	京都府京都市上京区 仁和寺街道六軒町西入四番町 139-1他	26100		35度 1分 13秒	135度 44分 38秒	2002/10/23	50㎡	共同住宅
平安宮中和院跡	京都府京都市上京区 千本通下立売上る十四軒町395	26100		35度 1分 7秒	135度 44分 44秒	2002/10/30	38㎡	共同住宅
平安京左京 北辺三坊五町跡・ 内膳町遺跡	京都府京都市上京区 丸丸通一乗下る電前町590, 407-1	26100	235	35度 1分 21秒	135度 45分 41秒	2001/12/3	51㎡	ホール
平安京右京 三条一坊十二町跡・ 壬生遺跡	京都府京都市中京区 西ノ京東月光町9、9-1	26100	461	35度 0分 20秒	135度 44分 26秒	2002/9/2	46㎡	店舗
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
平安宮大極殿院 跡 東方・聚楽遺跡	宮殿跡 集落跡	平安時代 古墳時代		平安時代前期整地層 ・土壇6基		土師器・軒瓦・緑軸瓦 ・緑軸尾瓦		被破壊部分のみの緊急調査を実施。
平安宮掃部寮跡	宮殿跡	平安時代		築地側溝				
平安宮中和院跡	宮殿跡	平安時代		東西溝1条・ 土壇1基		土師器・灰軸風字硯・ 軒瓦		工事中の立会調査を指導する。
平安京左京 北辺三坊五町跡・ 内膳町遺跡	都城跡 散布地	平安時代 弥生前期		中世土壇多数・溝・ 濠状遺構		土師器・須恵器・金箔 瓦		遺構保存のための設計変更を指導する。
平安京右京 三条一坊十二町跡・ 壬生遺跡	都城跡 散布地	平安時代 弥生時代～平安時代		平安時代遺物包含層 西欄筋小路西側溝		土師器・須恵器・瓦・ 富壽神寶		工事掘削が遺構に及ばないことを確認。

報告書抄録

ふりがな	きょうとしなにいせきしくつちようさがいほう							
書名	京都市内遺跡試掘調査概報 平成14年度							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	長谷川行孝・馬瀬智光・堀 大輔							
編集機関	京都市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒602-8435 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1							
発行機関	京都市文化市民局							
所在地	〒604-8571 京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京右京 四条一坊十二町・ 十三町跡	京都府京都市中京区 壬生森町29-1, 29-2	26100		35度 0分 3秒	135度 44分 26秒	2001/12/17 — 2002/04/26	104㎡	共同住宅
平安京右京 五条四坊十五町跡	京都府京都市右京区 西院東貝川町60-1, 61-1	26100		34度 59分 53秒	135度 43分 20秒	2002/11/20	55㎡	店舗
平安京右京 八条二坊十六町跡・ 衣田町遺跡	京都府京都市下京区 西七条南衣田町3他	26100	613	34度 59分 8秒	135度 44分 2秒	2002/7/9	30㎡	病院
長岡京左京 五条三坊十六町跡	京都府京都市伏見区 羽東師範川町302-1	26100		34度 55分 38秒	135度 43分 24秒	2002/8/7 —8/27	85㎡	共同住宅
北野麩寺・ 北野遺跡	京都府京都市北区 北野上白梅町7	26100	153 152	35度 1分 30秒	135度 44分 2秒	2002/11/1 ～11/5	16㎡	店舗
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物	特記事項		
平安京右京 四条一坊十二町・ 十三町跡	都城跡	平安時代		西櫓筒小路東西側溝 ・中世西新道側溝	土師器・青磁・瓦質土 器・木製品			
平安京右京 五条四坊十五町跡	都城跡	平安時代		平安時代遺物包含層 ・溝2条・土壇3基	弥生土器・土師器・須 恵器・灰釉陶器	遺構保存のため設計変更 を指導する。		
平安京右京 八条二坊十六町跡・ 衣田町遺跡	都城跡 散布地	平安時代 弥生時代—古墳時代		七条大路南側溝	土師器・須恵器・瓦質 土器			
長岡京左京 五条三坊十六町跡	都城跡	平安時代		掘立柱建物1棟・土 壇2基	土師器・須恵器・瓦			
北野麩寺・ 北野遺跡	寺院跡 集落跡	飛鳥時代—平安時代 弥生時代—室町時代		中世整地層・土壇1 基	瓦	遺構保存のため設計変更 を指導する。		

版 图

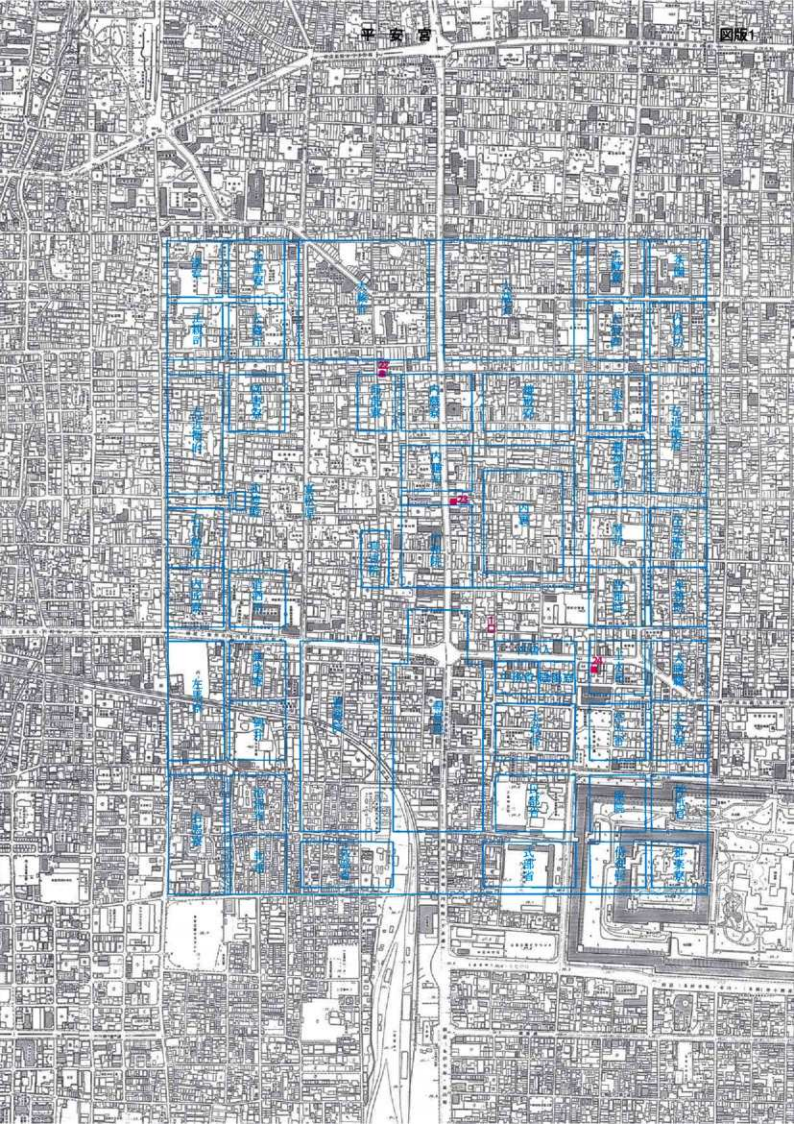
凡 例

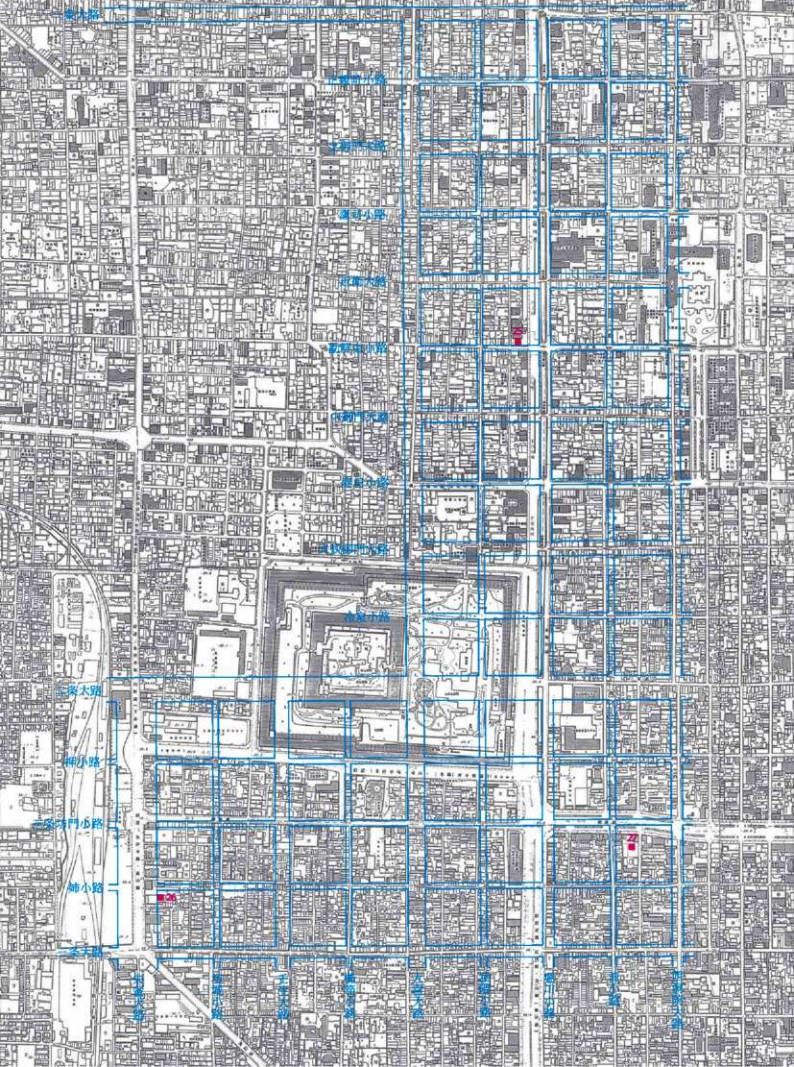
平成14年試掘調査地点

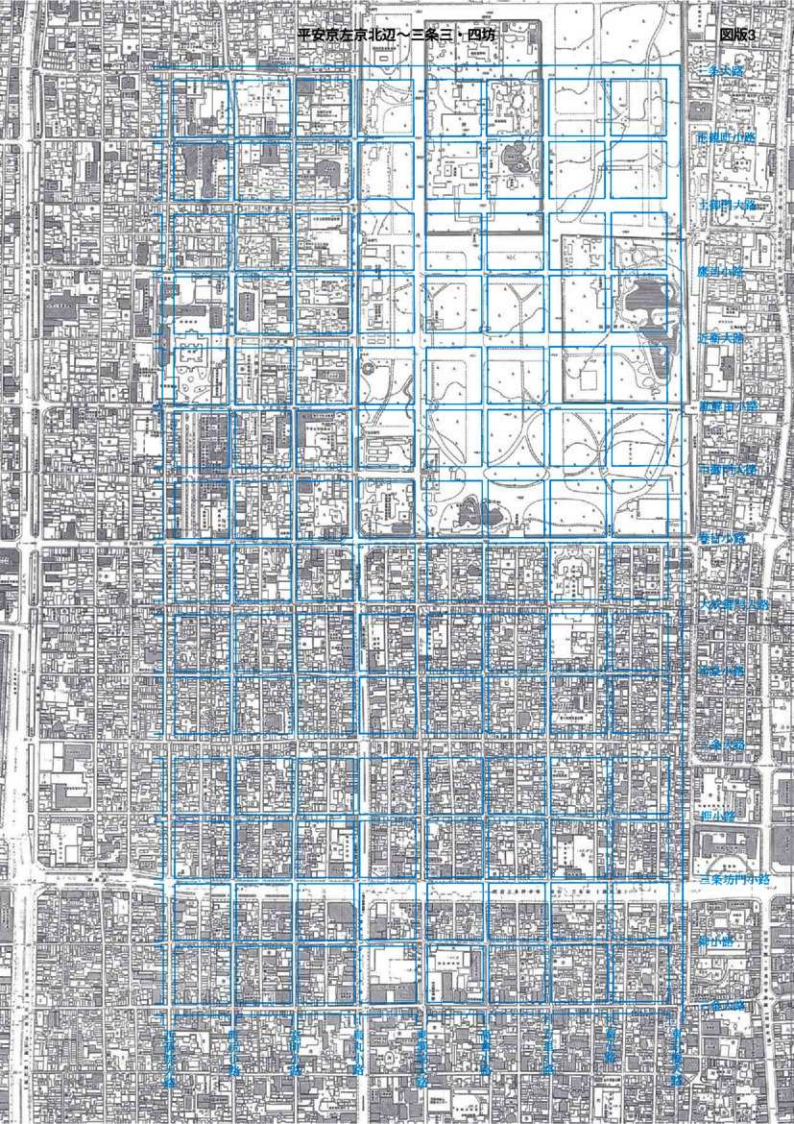
□ 1月～3月

■ 4月～12月

----- 遺跡範囲







三条大街

正親町小路

五條門大路

藤原小路

近衛大路

藤原田小路

中御門大路

藤原小路

大藏省門大路

藤原小路

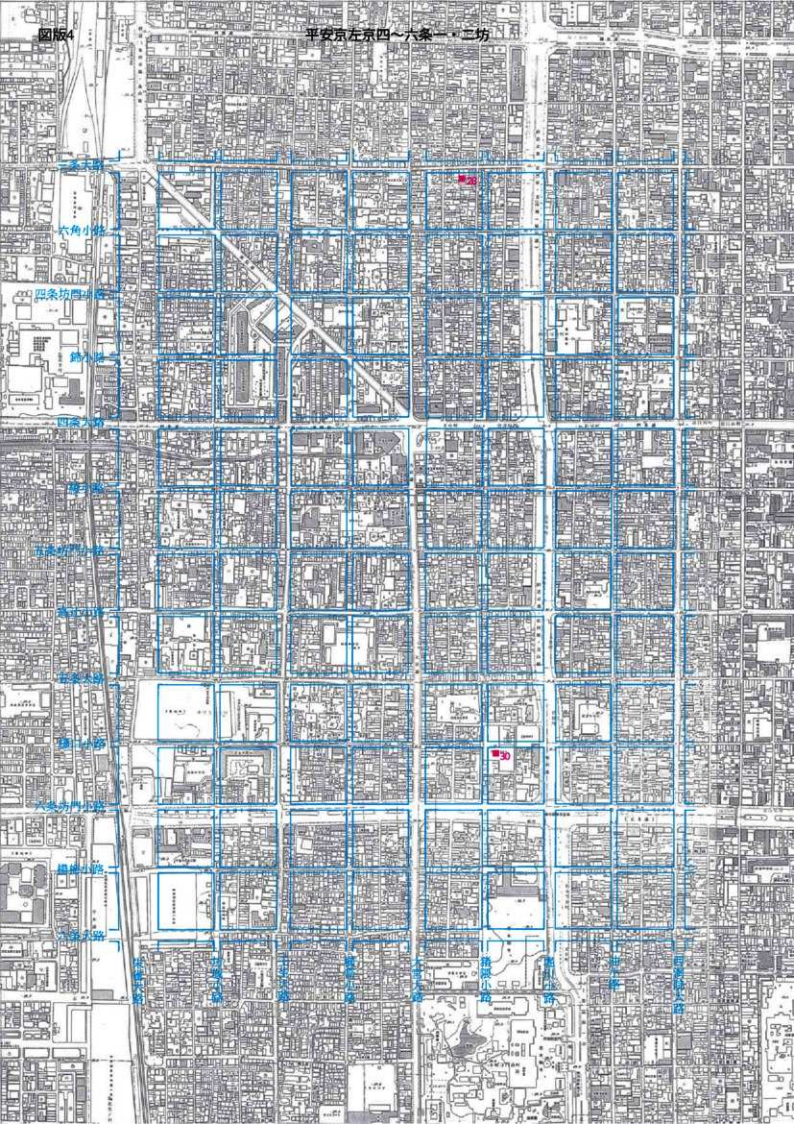
金小路

西小路

三条坊門内路

藤原小路

金小路



六角小橋

四条坊門

堀川

四条河原

堀川

堀川

堀川

堀川

堀川

堀川

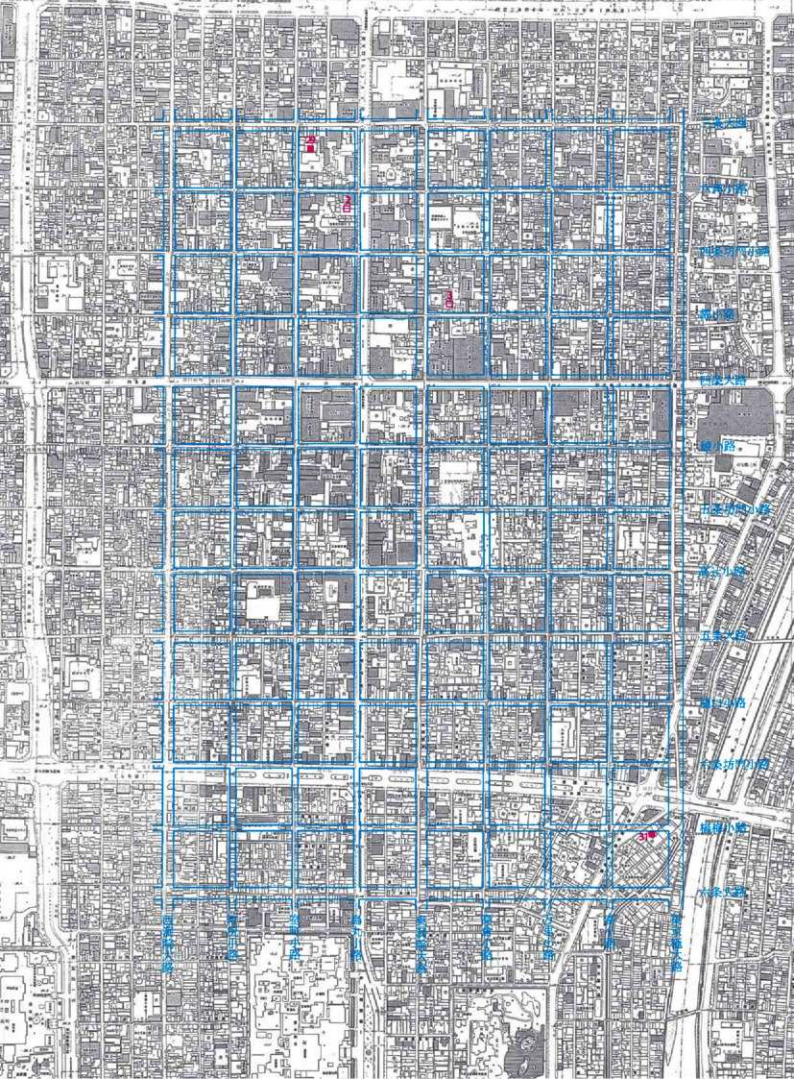
堀川

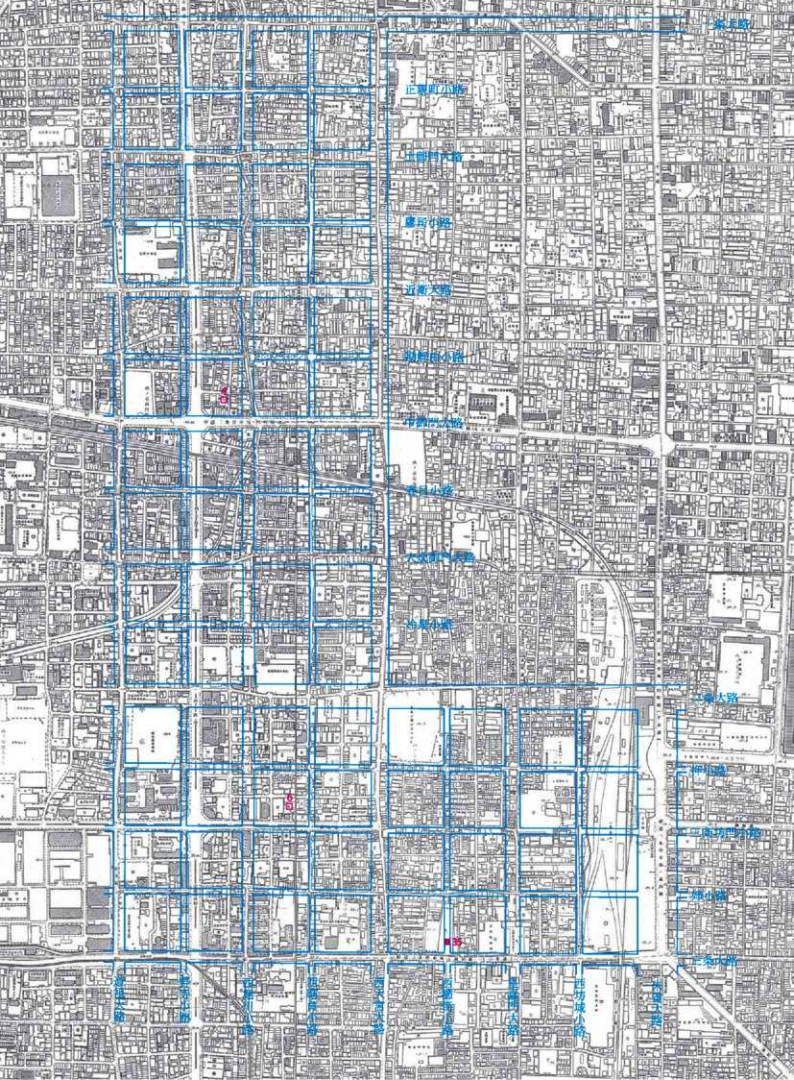
堀川

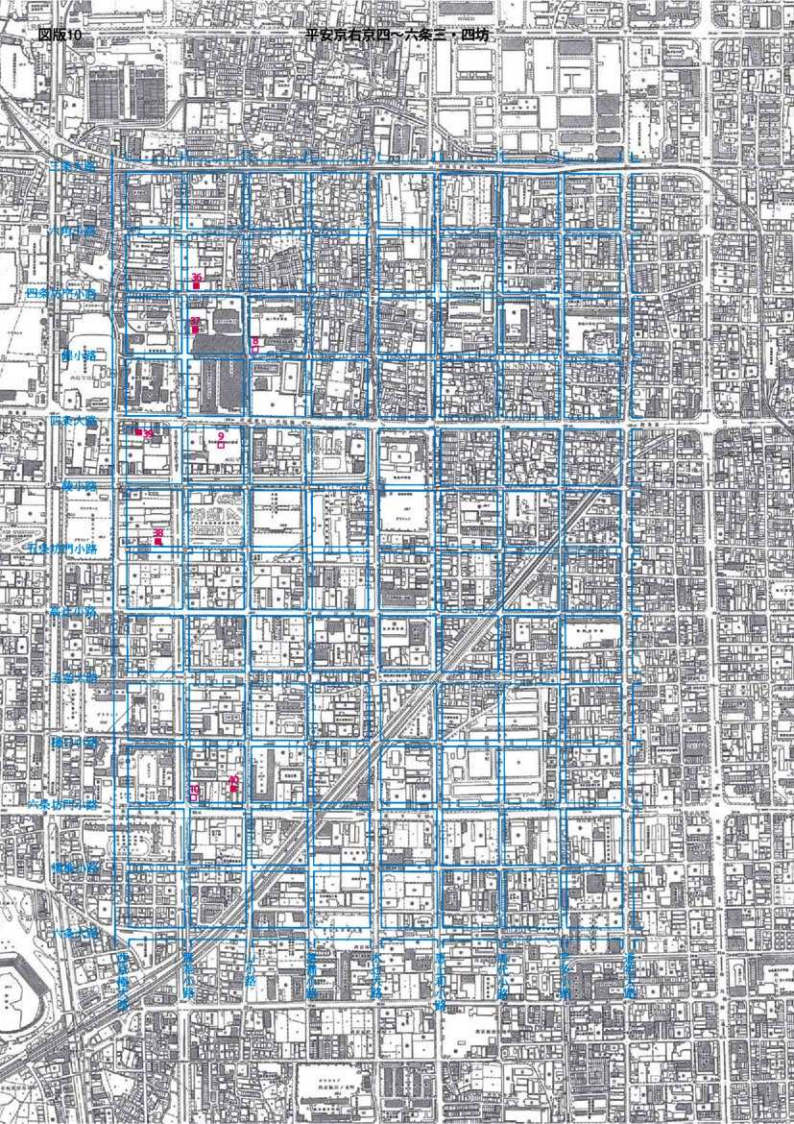
堀川

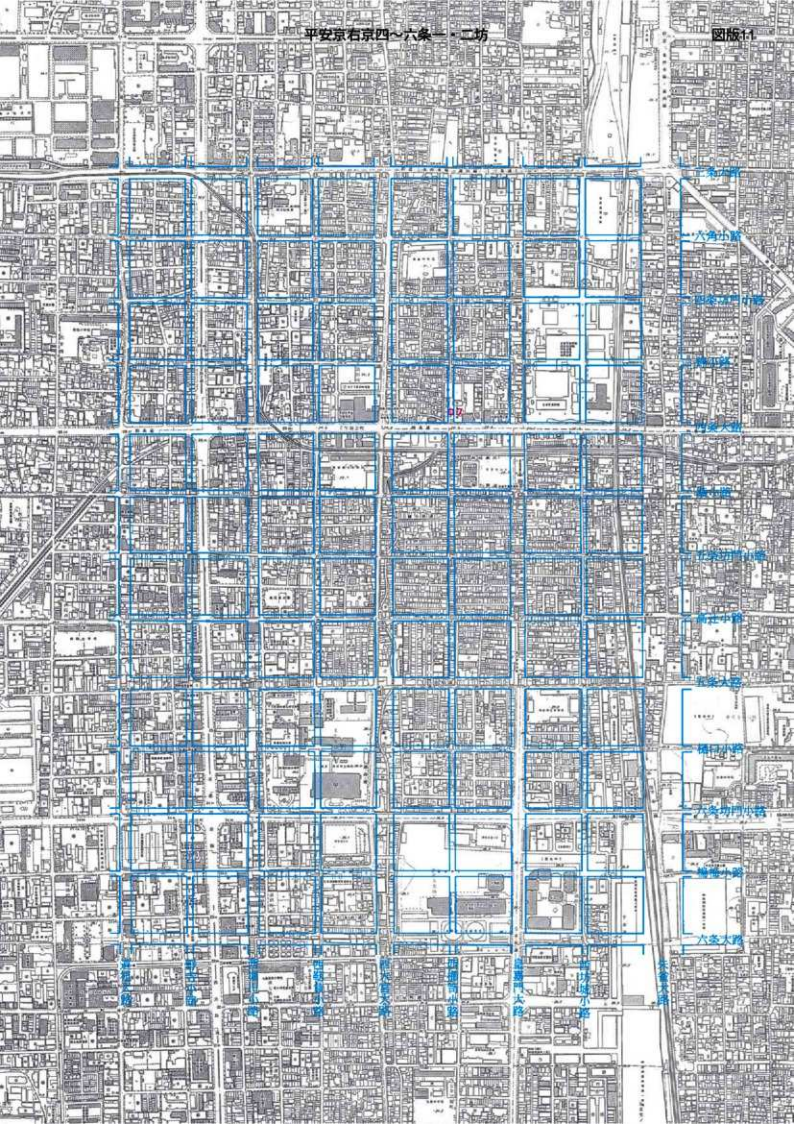
●30

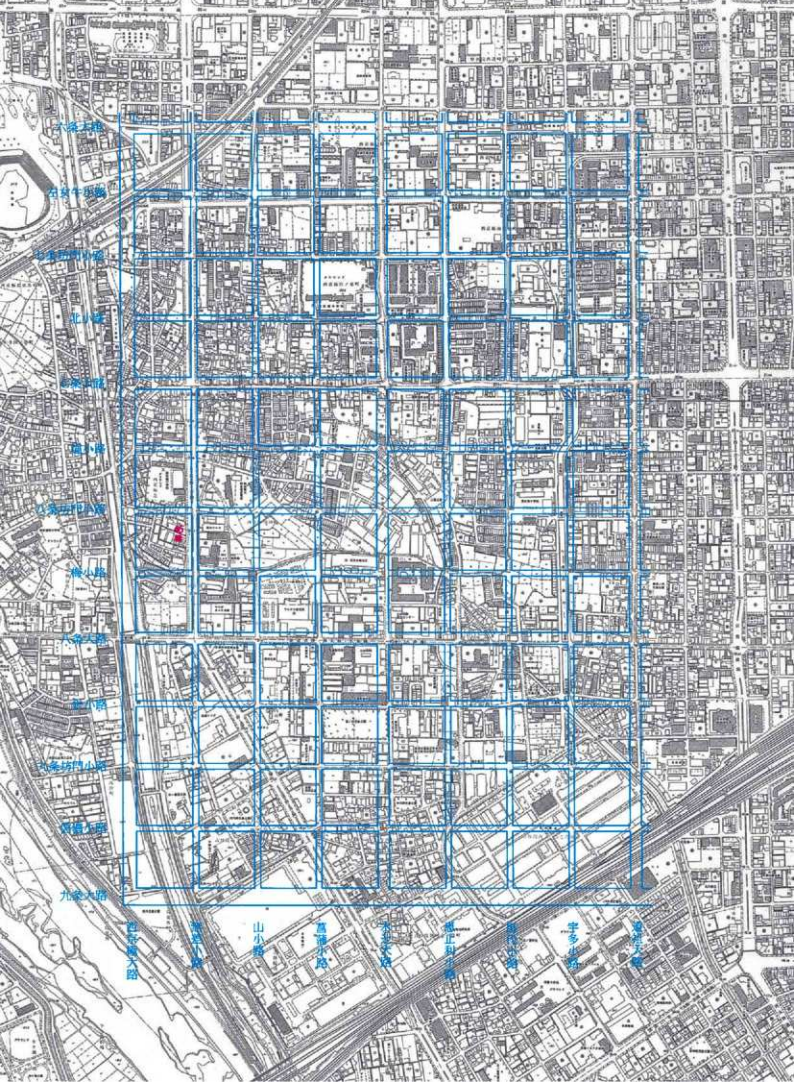
●30

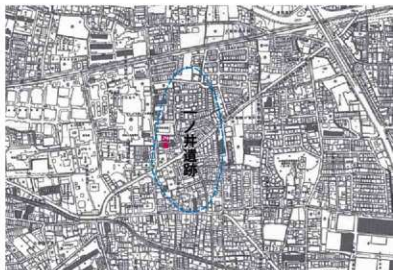


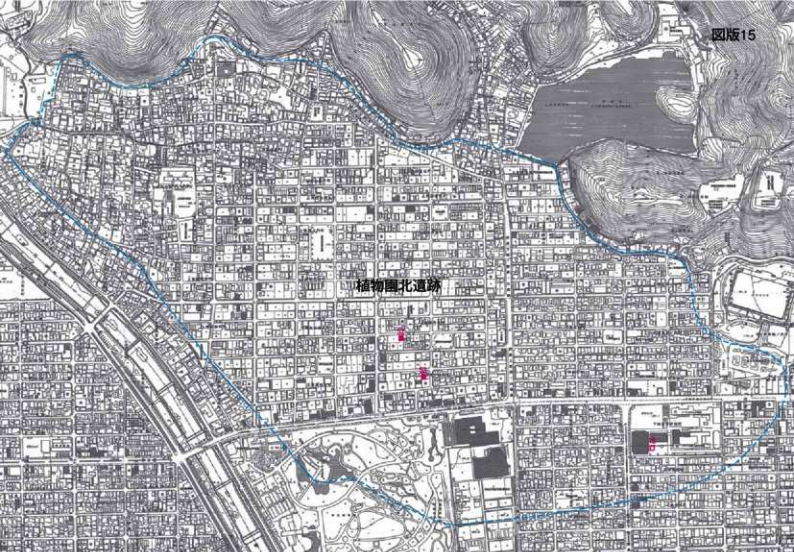


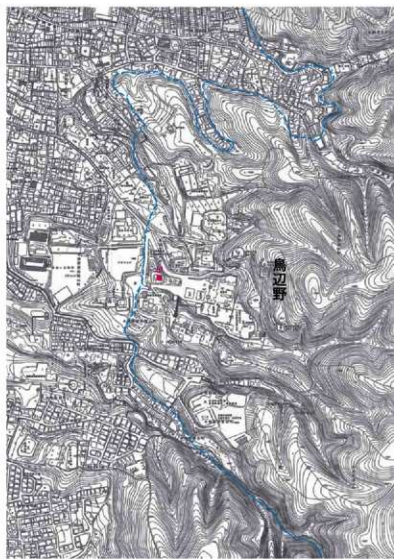


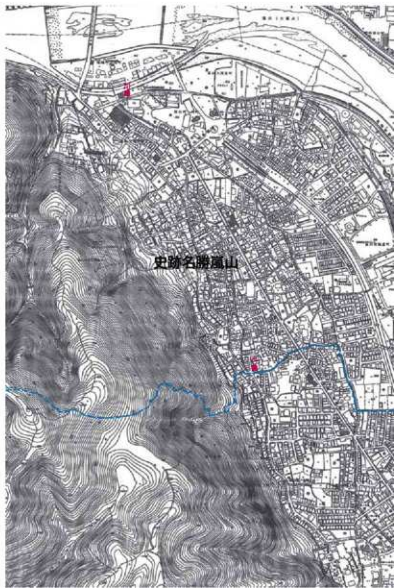














上鳥羽遺跡

鳥羽離宮跡

下鳥羽遺跡



長岡京防

75

京都市内遺跡試掘調査概報

平成14年度

発行日 2003年3月31日
京都市印刷物 第141120号
発行 京都市文化市民局
編集 京都市埋蔵文化財調査センター
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
TEL. (075) 441-5261
印刷 泰和印刷株式会社 TEL. (075) 605-6800

